



建築人

4

2015



建築人

4
2015

目次

2 大阪ホンマもん

4 インフォメーション・事業案内

6 建築人

狩野忠正

19 記憶の建築 松隈洋

東京駅 一九一四年 日本近代一〇〇年を目撃した駅舎の今

20 Gallery 建築作品紹介

アシックス スポーツ工学研究所東館

設計 竹中工務店 施工 竹中工務店

ラヴィマーナ神戸「瑠璃」

設計 アバクス・アーキテクト 施工 青木あすなろ建設

学園北の家

設計 マニエラ建築設計事務所 施工 西友建設

SQUARE

設計 井上久実設計室 施工 西友建設

24 建築の射程 山本博之 西 芳実

被災地写真のアーカイブ―景観の変化を記録し記憶を紐づける

26 ひろば 大塚康央

新しい動きをしらえて―工場移転跡地利用とこれからの茨木市づくり―

28 第34回大阪都市景観建築賞入賞作品

30 理事会報告 建築相談 編集後記

サポートと社会貢献

大阪府建築士会副会長 上田茂久

新入会員を勧誘するとき、「建築士会に入って、どんなメリットがあるの？」とよく聞かれます。「メリット」あまり好きな言葉ではありませんが、入会するのに会費もかかるし、それに見合う何かを求めることは至極当然です。

大きなメリットとしては、CPD制度のように、研修受講が行政の設計や工事の受注の加点になるものや、補償制度のように、加入することで、設計・工事ミスに対する賠償責任補償を受けられるものがあります。一方、自己啓発の研修や、委員会活動による仲間づくりのように、後々になって、自分のメリットとなるものもあります。

さて、大阪府建築士会は建築士のネットワークの中心にあるキーステーションを目指し、建築士に対するサポートと社会貢献活動を二本柱として活動しています。前述のメリット以外にも、頑張る建築士を応援する表彰制度や、HP、建築人（月刊誌）による最新の情報提供、トラブル時の提携弁護士相談等を用意しています。また、消費者からの建築相談や、地域に根ざした建築活動、被災地の建築物応急危険判定活動等、幅広い社会貢献活動も行っています。

今、私達建築士は、多くの情報を共有し、共に輪を広げスキルアップに努め、社会に貢献し実績をアピールする事が求められています。積極的に士会のサポート、活動を活用いただき、各々のメリットを築こうではありませんか。

大阪ホンマもん解説

写真 田籠哲也 文 牧野隆義

大阪証券取引所を中心とした金融街にボンと近代建築が佇んでいる。あたかもその空間だけがタイムスリップしたかのようだ。その愛くるしい建物こそ「北浜レトロビルディング（旧桂隆産業ビル）」だ。

明治四五年（一九二三年）、北浜に株仲買商であつた桂隆産業の商館として計画された。地下一階・地上二階建て、構造は煉瓦造で大林組による設計施工。戦後は商社として利用されていたが、その後売りに出され、平成八年（一九九六年）に現オーナーの小山氏が買い取りこの建物を再生。英国喫茶「北浜レトロ」としてオープンさせた。

建物の良さを活かした英国式設えを実現させるため、小山氏は英国に渡り独力でインテリアを学び、建築家や内装デザイナーに頼らず自ら図面を描き、工務店と協力し当時の姿をここに再現させた。現在はオフィスビルに挟まれて窮屈そうに見えるが、道行く大阪人は本物を見逃さない。着飾ったご婦人連れが、川を挟んで北側に広がる薔薇園を優雅に眺めながら、英国式の紅茶を嗜む風景がここにはある。

建築人 4 2015

監修 公益社団法人大阪府建築士会

建築情報委員会

編集 建築情報委員会『建築人』編集部

編集人代表 米井 寛

編集人 荒木公樹

河合哲夫

筑波幸一郎

橋本頼幸

事務局 山本茂樹

印刷 中和印刷紙器株式会社

飯田英二

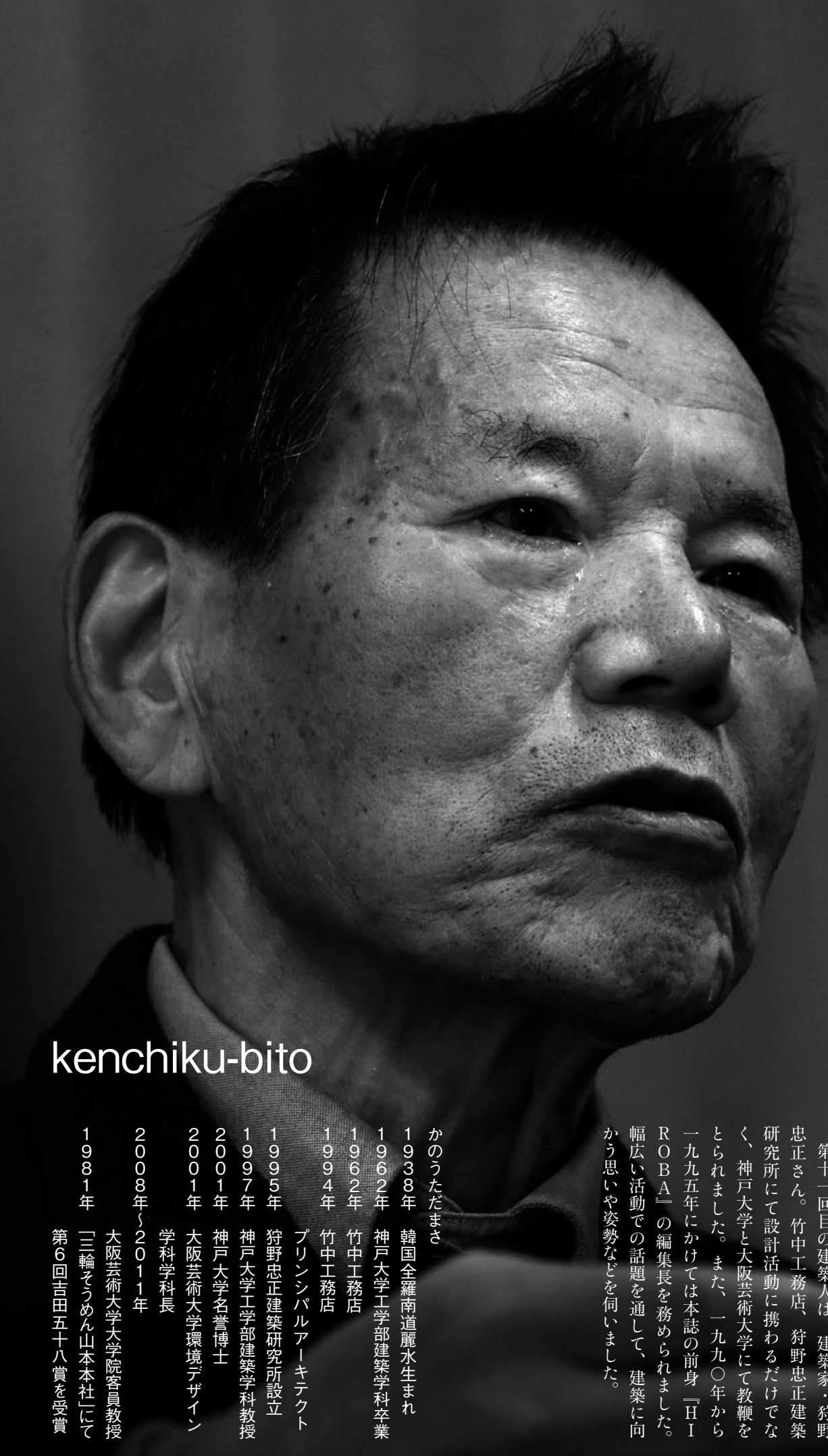
黒川祐樹

中江 哲

牧野隆義

母倉政美

狩野忠正



建築そのものではなく、建築に関わる人に焦点をあて掲載する「建築人（けんちくびと）」。人の持つ魅力は、職域を超えても理解しあえると考えます。創作の源泉や姿勢、人生哲学、ライフスタイルなどを垣間見ることで、共感できる気づきを与えることを期待しています。

第十一回目の建築人は、建築家・狩野忠正さん。竹中工務店、狩野忠正建築研究所にて設計活動に携わるだけでなく、神戸大学と大阪芸術大学にて教鞭をとられました。また、一九九〇年から一九九五年にかけては本誌の前身「H I R O B A」の編集長を務められました。幅広い活動での話題を通して、建築に向かう思いや姿勢などを伺いました。

かのうただまさ

1938年 韓国全羅南道麗水生まれ
1962年 神戸大学工学部建築学科卒業
1962年 竹中工務店
1994年 竹中工務店
1995年 プリンシパルアーキテクト
1997年 狩野忠正建築研究所設立
2001年 神戸大学工学部建築学科教授
2001年 神戸大学名誉博士
2001年 大阪芸術大学環境デザイン学科学科長
2008年〜2011年 大阪芸術大学大学院客員教授
1981年 「三輪そうめん山本社」にて第6回吉田五十八賞を受賞

■生い立ちについて

荒木 狩野先生は、韓国にお生まれになりました。先生の作品が持つおらかさを見ると、そのことが先生の建築家としての人生に深く影響していると感じます。まずは先生の生い立ちについてお聞かせください。

狩野 私は、一九三八年（昭和十三年）、韓国の全羅南道麗水に生まれました。麗水は、数多くの島とリアス式海岸からなる美しい港町です。私の家族は、父が経理をやっている、当時父親の仕事の関係で韓国におりました。

敗戦により帰国することになったのですが、両親と粗末な帆船で機雷の浮遊する玄界灘を渡って命からがら唐津にたどり着きました。その後、両親の故郷である九州島原の西ノ浦坂に引き揚げ、ここで小学二年生から五年生までを過ごしました。西ノ浦坂には、おそらく島原の乱の残党と思われる狩野姓が全住民の二割を占める土地です。その後一家は明石に移ることになるのですが、父は大変苦労をしながら生計を立てていました。

荒木 狩野先生は、子供心にもお父様が苦労される姿を見ながら育ち、人の暮らしのあり様に問題意識を持ち始め、それが後に建築に取り組むことにつながったのですね。

狩野 そうです。現代とは時代が大きく

異なりませんが、私だけでなく日本全体が悲惨な状況から立ち上がる中で、前向きに建築に取り組むことが自分の生活だけでなく、社会に役立つのではないかと感じました。

■建築を志したきっかけと学生時代

荒木 狩野先生が建築を目指すきっかけとなったことをお聞かせください。

狩野 大きなきっかけとしては、閑谷学校との出会いがあります。祖父の墓参のため岡山に帰郷した際、三歳の私が母に背負われ閑谷学校を訪れました。今でははつきりと理解できるのですが、校地を取り巻く石堀、本堂をはじめとする備前焼の瓦屋根、頼山陽が訪れた茅葺き屋根の黄葉亭が私に大きな影響を与えています。荒木 神戸大学での学生時代は、どのようなものだったのでしょうか？

狩野 私は建築構造学が専門の堯天義久（注1）先生のゼミに所属していました。堯天先生は、後に神戸大学の学長を務めることとなった方です。堯天先生に教わったことは、構造と一言で表しても単なる技術ではなく、建築のあり方でした。物の成り立ちを、つまり基本を教わることできた本当によいゼミでした。堯天ゼミからは、後に建築学会作品賞を受賞することとなる真喜志好一さんが助手を務められる等、多くの人材を輩出しました。

また、堯天先生は乱読をよしとし、常に読書を勧められていました。私は、自分の専門である建築以外の本も多く読むように心がけました。学生時代は和辻哲郎の『古寺巡礼』を、これは大学の卒業後ですが栗田勇の『紅葉の美学』を愛読書としていました。そして、本を読むことと並行して、奈良・京都を中心に古建築を多く見ることを心がけました。

■竹中工務店で学んだこと

荒木 竹中工務店に勤められていた頃のお話をお伺いできますでしょうか。

狩野 竹中時代に一番強く心に残っていることは、私が作図した立面図に対して岩本博行（注2）さんから「鳥が見えているぞ」と指摘されたことでした。荒木 「鳥が見ている」とはどういうことでしょうか。

狩野 鳥はいろいろな所から建物を見るわけで、それを言われて本当にショックでした。人間はどこかでおろそかになる部分があつて、目の届くところだけしか見ないでしょ。図面ではそこを考えないといけないと岩本さんは伝えようとしてくれたのでしょう。あと、小川正（注3）さんからは、「アルミを使うからにはアルミの原理を知りなさい」と、物の本質を理解することの大切さをたたき込まれましたね。

中澤 狩野先生が担当された「播磨屋本店生野総本店」（注4）「三輪そうめん山本社」（注5）がJIA二五年賞を受賞されました。先ほどおっしゃっていた「物の本質」を押さえているからこそ、長い間にわたる評価に耐えるものになっていると思います。

狩野 「播磨屋本店生野総本店」は、設計コンペによって選ばれた物件でした。要望としては瓦葺屋根ということでしたが、私たちは茅葺屋根で提案しようと決めました。理由は、この地域に茅葺職人がたくさんいることもありましたが、背景の山並みやその場所が茅葺を求めていると感じたからです。その想いを絵（10ページに掲載）に表現してもらったのですが、建物と山や川との関係が明快に伝わる本当にいい絵でした。

荒木 審査はどのように進んだのでしょうか。

狩野 審査員は社長おひとりでした。十以上の参加者のプレゼンの一番最初が私たちでした。瓦葺屋根でと要望しているのに信念を持ち茅葺を提案したことに、社長は理解を示してくれ、他の案を見ていないのに「あなたが一位だ」と言われたことにはびっくりしました。

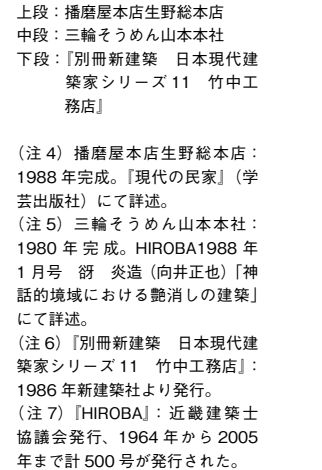
「播磨屋本店生野総本店」の配置は、家相から決まっています。鬼門となる北東側の前面道路から直接アプローチする



上段：韓国全羅南道麗水の風景
中段：閑谷学校
下段：神戸オリエンタルホテル
1964年完成、狩野氏が岩本博行氏のもとで詳細設計を担当

6ページ撮影：田籬哲也

（注1）堯天義久（1921-2013）：神戸大学名誉教授。神戸大学第8代学長。専門は建築構造学。
（注2）岩本博行（1913-1991）：1932年都島工業高校卒業後、竹中工務店入社。1962年大阪本店設計部長。1972年常務取締役。代表作に「御堂ビル」「国立劇場」。
（注3）小川 正（1912-2000）：1937年早稲田大学卒業後、竹中工務店入社。1953年大阪本店設計部長。1969年常務取締役。代表作に「関電ビルディング」「新朝日ビルディング」。



ことを避け、来訪者には一度南に回ってもらってから建物にアプローチする形としています。

荒木 「播磨屋本店生野総本店」「三輪そうめん山本社」と、屋根と山の関係が共通しており、狩野先生の実風景でもある閑谷学校とイメージが重なります。そして、閑谷学校の講堂の備前焼の瓦屋根と黄葉亭の茅葺き屋根という対比を原風景として理解され、この二つの建築につながっていったということがよくわかりました。

狩野 あと、鳥の視線も忘れてはなりません。

荒木 どこから見られても大丈夫な形として、やはり屋根で成り立つということが建築にとって大切です。日本は近代建築の発展によって屋根の持つ役割を見失ったのではないかと思います。

狩野 「三輪そうめん山本社」も、強く印象に残っています。背景に三輪明神の山が控えている敷地でした。社長は、設計するためなら「世界じゅうどこへ行ってもいい」と言われて。：。本場にすばらしい出会いでした。

森本 『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ―竹中工務店』（注6）での建築家へのアンケートで「竹中という言葉からイメージする顔は誰でしょうか」という質問がありました。その中で建築家

ナの自然とガウディの建築が融合しています。ガウディはバルセロナから近いモンセラットの山のごつごつとした岩肌から神の啓示のごとく建築へのイメージとして洗礼を受けたと語っています。ガウディの言葉ながら、建築の威力が感じられます。現地産の石、タイル、レンガまでは同意できますが、要所、要所にほどこされた蛇、蜥蜴のアイアンワークは何を意味するのか、どう理解したらいいのか私にはわかりません。しかし、この疑問は民族の違いといった単なる区分けではとても語れないと思います。建築の創造は、多様な条件が積み重なった結果によるからです。

荒木 その他に『HIROBA』で影響を受けたことなどありますか。

狩野 東孝光（注11）さんの影響はとて大きかった。『HIROBA』のある企画会議で、私は永遠性を、東さんは短期間でやり替えるという方法である一過性をテーマとして取り上げようとしたことがありました。そこで五十人くらいの参加者で賛否をはかるわけですが、意見が完全に分かれました。

荒木 そのテーマというのは永遠性と一過性が併存した形だったのでしょうか。狩野 結果的には、併存でしたね。永遠性と一過性というのは、新しいテーマでもあり、古くからのテーマです。東さん



の石井修さんが小川さんと岩本さん、狩野さんの三人を挙げられており、今日のお話とリンクしています。

狩野 おぼえています。石井先生に認めていただいて本当にうれしかったです。建築をつくる上では人と人とのつながりが欠かせないものですが、私自身は師・施主・仲間の全てにわたってとても恵まれていました。

■『HIROBA』の編集に参加して
荒木 狩野先生は、『HIROBA』（注7）の編集に参加され、一九九〇年から九五年にかけては編集長を務められました。まず、一九八五年に一年間連載された「建築家の世界」（注8）についてお話しください。

狩野 村野藤吾さん、前川國男さん、丹下健三さん、大江宏さんといったそうそうたる建築家の方々にインタビューしました。

荒木 スタートとなる一月号は、村野先生へのインタビューでした。

狩野 村野さんだけは、追悼号になりました。インタビューの一ヶ月半後に亡くなられました。だから年が明けて発刊される一月号を村野さんに決め、そして最後の一二月を丹下さんとしました。当時この二人は特別だったから村野さんと丹下さんを決めたらあとは決まるだろうと

は、自分のテーマを改めて考えるきっかけを与えてくれました。

母倉 そうですね。『HIROBA』では、年間テーマをよく決めていましたよね。そのテーマが狩野さんからいつも出されていました。近畿二府四県の委員の人が持ち寄るのですけど、狩野さんからは一番新しい、まだ世の中に浸透していないようなテーマがばんと出てきていましたね。

狩野 僕はアンテナをいっぱい立てていたからね。

母倉 それが的を得ていて、言われたときはみんな本当にきょんとしているんだけど、何カ月かたつと、そういう言葉が世の中にあふれ出てくる感じでした。**森本** 作品的には永遠性という方向に進みながらも、活動的には最新をやっているという、その二つのバランスがすごく面白いですね。

濱田 先生の事務所にはほとんど建築の専門書がありません。おそらく、それが先生の言われるアンテナだと思っています。先生の興味がどこにあるのかが一目でわかりました。

■ベルリンでの暮らし

荒木 狩野先生は阪神淡路大震災の年に独立され、ベルリンで事務所を開設されました。その経緯について、お聞かせく

思って。：。順調に決まった中で、岩本博行さんだけはインタビューを辞退されました。岩本さんは、「村野先生や丹下先生といったそうそうたる面々と私が並ぶのはおかしいだろう」と。

森本 狩野先生は常々「見えないものを見る視点を持ちなさい」と言われているとのことですが、当時はポストモダンの時代で、表層的なところしか見ようとしていない、本質が伝わっていないという危機感が、インタビューを行う動機になったのではと推測しました。今、私たちがさせてもらっているものもまさに同じなのですが。

狩野 そのとおりだと思います。『HIROBA』を通じて学んだことを一言でいえば、考えること。に尽きます。近畿から発信する雑誌として身近に感じますが、核となるのは近畿の歴史性と地域性をふまえた論の展開がなされてきたことです。特集、作品論、技術論の一つ一つが私の思考に深く影響を及ぼしました。

また、『HIROBA』は、建築分野と異分野とをつなぐだけではなく、建築分野の横どうしをつなぐ役割を果たしていました。具体的には、関西にいる職人を訪ねていくきっかけを与えてくれました。伝統の技を生かす土壌が近畿には残されています。大工、飾金物師、瓦師、塗師、柿葺師、ガラス工芸職人、和紙職

ださい。

狩野 グラフィックデザイナーの矢萩喜從郎（注12）さんから影響を受け、ベルリンまたはチェコのクラコフで暮らすように考えていました。結果的には当時の治安状況を踏まえてベルリンに決めましたが、ベルリンでの生活は一九九五年から一九九七年の二年間にわたりました。

ベルリンは、壁の崩壊後一気に再開発を進めました。中でもポツダム広場は大きな再開発でしたが、短時間で一気に進めた結果、出来が良くないと考えます。どのようなことでも何度も往き来しながらゆっくりと前に進むことが大切です。同じベルリンでもダニエル・リベスキンドのユダヤ博物館は一〇年の歳月をかけて設計・建設がなされましたが、こうして出来上がったものを本物といえます。

ベルリンでは、ベルリン・フィルの公演中は毎日のようにコンサートに出かけました。正面左奥のピアノの演奏がよく見える、学生向けの安価な席に陣取っていました。ベルリンの文化・歴史の中に身を置くことで、ベルリナー（ベルリン人）としての暮らしを本当に満喫していました。

■「NPO法人これからのまち・建築・みどりをつくる会」での活動
荒木 狩野先生は、設計・教育活動と並

人と多くの職人集団が息づいていて、何百年経っても新しいものを生み出す力が存在します。彼らから技だけを教えられたのではなく、何代にもわたる家業を受け継いだ生活習慣を学びました。職人の仕事場には現代人の仕事場がない凛とした風が漂っていて、他を寄せつけない確かな領域があるのです。何年経っても新しいということとは建築にとって大切なことです。ただ機能一点張りではなく、技術が一人歩きするものでもなく、人間の手法があって建築は生命を保つことができるのです。私達が今近畿の技、個性を静かに見つめなおす時で、そこから何が可能かを見極める必要があると思います。

荒木 「ヨーロッパの建築家たち」（注9）は、後に単行本化（注10）された連載です。これは狩野先生が世界じゅうを旅さすスケッチを積み重ねたことがきっかけの一つですが、狩野先生にとって、旅というのはどういった意味を持つものだったのでしょうか。

狩野 旅は、とても重要です。建築はそれが成立する場所との関わりを強くもっているからです。旅はそのことを具体的に理解するきっかけとなります。

例えば、バルセロナにあるガウディの一連の建築を訪れたときその思いを強くしました。ガウディはまさにバルセロナが生んだ建築家だと。それほどバルセロ

行して、「NPO法人これからのまち・建築・みどりをつくる会」を設立、代表者として運営されていました。この活動について、背景からお聞かせいただけないでしょうか。

狩野 私たちを取り巻く環境には、大きな変化が表れてきています。私たちは、これからの社会を担っていく世代に何をどのような形で残し伝えていけばよいのかと考えます。無秩序に形づくられる都市やその構成要素である建築、またそれらを取り巻く環境、このままでは負の遺産として後世に残していくことになるのではないかという問題意識を持っています。

私たちはそのような状況に関心を持つ人たちと共に、たとえ小さなことからでも、これからのあるべきまちの姿・建築・住まい・環境について、地域住民の視点から提案し、人材の育成に力を注いでいきたいと考えました。

荒木 活動の具体的な内容についてお聞かせください。

狩野 「子どものための建築教室」は、さまざまな人を巻き込み、連携しながら取り組みました。私自身のアトリエを開放したり、出張も幾度となく重ねました。また、一九八〇年代半ばから、建築設計・デザインに関わる人たちやものづくりに関わる人たちが集まって定期的に懇談する場を持っていました。その後、環境・

上段：連載ヨーロッパの建築家たち
中段：ベルリン・フィルハーモニック・コンサートホール（設計ハンス・シャロウン）

（注8）『建築家の世界』：『HIROBA』1985年1月号から12月号まで12人の建築家へのインタビュー連載。
村野藤吾・浦辺鎮太郎・海老原一郎・大江宏・東畑謙三・前川國男・吉村順三・清家清・彦谷邦一・西澤文隆・芦原義信・丹下健三の各氏ヘインタビューを実施。
（注9）『HIROBA』1987年1月号から1989年12月号まで計36回にわたり連載。
（注10）『建築ノート』として新建築社より1992年2月刊行。現在まで5刷を重ねる。

（注11）東孝光（1933-）：建築家。大阪大学名誉教授。大阪大学卒業後郵政省建築部、坂倉準三建築研究所を経て1966年東孝光建築研究所（1983年東環境・建築研究所に改称）設立。代表作に「塔の家」。

（注12）矢萩喜從郎（1952-）：デザイナー、建築家。グラフィック・エディトリアル・サインをはじめとするデザイン領域から、写真・アート・建築・家具・評論などを手がける。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞等受賞多数。



神戸大学百年記念会館

播磨屋本店生野総本店



■建築・まちづくりに携わる次世代を担う人たちに伝えたいこと
荒木 今回のお話で、狩野先生がさまざまな活動を通して建築について深く考えられてきたことが理解できました。最後になりますが、建築・まちづくりに携わる方々へのメッセージをお願いいたします。
狩野 設計を進める上で最も強く影響を受けたのは、古代都市です。建築が美しいということは、機能がなくなり周辺状況が変わっても、厳然と存在することです。古代都市は、ほとんどが遺跡となつて残っています。遺跡は、装飾や目的のために取り付けられたものなど、余分なものがそぎとられた後にもなお残される骨格です。

古代都市はいつの時代にあっても、当時の使いやすい材料で、最も優秀な職人の技でつくられるのです。そこで大切なことは、一歩一歩前進したことを示す素

ランドスケープ・音楽・芸能などの分野の人たちの参加も増え、「土曜会」として二ヶ月に一度の頻度で勉強会を行っていました。そして、社会には目立たないが良いものをつくり、伝えていこうと努力している人たちが間違いなく存在しています。そのような優れた技能を持つ人・集団を発掘・顕彰して、社会に広く伝えるための活動にも取り組みました。

材と技術が使われて感動を呼び起こすということなのです。
また、先程お話しした村野さんのインタビューでは、設計中の模型を家に置き眺めては直しといった作業を繰り返されている話を伺いました。私自身もスタッフに苦勞をしながら夜を徹して作り上げた模型を壊して直したことは一度や二度ではありません。スタッフに対して本当に悪いことをしたと思いますが、それが正しかったと信じています。

建築はそれほど社会にとって大切なもので、決しておろそかにしてはなりません。ただ、最近は建築界だけでなく、社会全体が建築に対して怠けているような気がしてなりません。日本の社会はかつてと比べて豊かになってはいるものの、社会の関心が基本ではなく、些細なことに向かっている。建築をつくらないとい

かん。
荒木 本日は狩野先生が療養中にも関わらず、長時間にわたりインタビューにに応じていただきました。今日受け止めたお話を胸に刻んで日々頑張つてまいります。本当にありがとうございました。



播磨屋本店生野総本店 弦田早苗 画
透明水彩絵具 水彩紙 H550×W1320

11ページ写真撮影
上段：吉村行雄
下段：東出清彦

協力
狩野新
1968年 兵庫県生まれ
1993年 近畿大学理工学部建築学科卒
1993年 レンゾピアノビルディングワークショップジャパン
1995年 狩野忠正研究所
1999年 狩野新アトリエ設立

濱田康郎
1975年 広島県生まれ
2000年 神戸大学大学院（博士課程前期）修了
2000年 株式会社竹中工務店ハービスエント設計室
2004年 SUAKX共同設立
2008年 濱田康郎建築設計事務所設立

聞き手
河合哲夫
1967年 京都市生まれ
1992年 京都工芸繊維大学大学院（博士前期課程）修了
1992年 株式会社竹中工務店

森本 雅史
1974年 三重県生まれ
1998年 京都工芸繊維大学大学院（博士課程前期）修了
1998年 株式会社東畑建築事務所
2009年 森本雅史建築事務所設立
近畿大学工業高等専門学校非常勤講師

中澤 博史
1969年 大阪府生まれ
1992年 近畿大学理工学部建築学科卒
1992年 株式会社大建設
1998年 中澤建築設計事務所設立

北 聖志
1976年 大阪府生まれ
2001年 神戸大学大学院（博士課程前期）修了
2001年 二井清治建築研究所
2007年 THINK－綴建築士事務所設立
近畿大学非常勤講師

河野 学
1979年 大阪府生まれ
2008年 大阪大学大学院（博士後期課程）修了
2008年 大阪大学大学院特任研究員
2009年 大阪府立工業高等専門学校講師
2013年 京都市住宅供給公社

奥河 歩美
1976年 兵庫県生まれ
2001年 神戸大学大学院（博士課程前期）修了
2001年 共同設計株式会社
2007年 O+O architects
2010年 空間計画株式会社

広瀬 和也
1983年 兵庫県生まれ
2009年 大阪市立大学大学院（前期博士課程）修了
2009年 株式会社東畑建築事務所

本特集責任編集人
荒木 公樹
1971年 大阪府生まれ
1995年 神戸大学工学部建築学科卒
1995年 建築環境研究所
2003年 空間計画設立

時代が建築を創らせる

狩野忠正



ここでは、狩野忠正氏の著書『建築ノート』（新建築社より1992年刊）の冒頭論文「時代が建築を創らせる」を転載する。ヨーロッパ、アメリカにおける19世紀の近代建築のあけぼのから20世紀末の現代建築に至る動向が理解できる。簡潔でありながら示唆に富んだ論文であることからここに再掲した。
左写真：ロンシャンの教会　ル・コルビュジェ設計（撮影荒木公樹）

不思議な彫刻を眺めている。五年前前から私の机の近くに置かれている。こちらから見るというよりも、どのように移動しても彫刻の方から見透かされてしまうといった方が正確だ。彫刻はアフリカ原住民の創作となるマコンデ像である。手足は無気味なほど細長く、顔は正面と左右を向いているかのようだ。

このマコンデの彫刻は二〇世紀初め、キュービズム運動に多大な影響を与えた。ルネサンス時代から受け継がれてきた写実の美学はキュービズムによって形態の解体が行われ、再構成されるという知的な革命へと発展した。形態は単純化され、視点の変化をも写しとする作業が進められていった。セザンヌ、ピカソ、ブракはキュービズム運動の中心となって絵画の分野で活躍した。この運動の影響を受けたのが、ル・コルビュジェである。彼は正面性、対称性をとってきた建築の概念を壊してしまつた。ル・コルビュジェは画家であり、建築家であるという仕事上の位置づけによってより近くキュービズム運動を受け継ぐことになった。まさにマコンデの彫刻とコルビュジェの建築には共通するものがある。

時代背景が強く作用したと関係がある。ロンシャンの教会、ラ・トゥーレット修道院、サヴォア邸に見るキュービズムは、セザンヌが試みた、自然を円錐、球、円筒に置き換えて描いた絵と共通するものがある。キュービズム運動と同じ時代に起きたアーツ・アンド・クラフツ運動は、産業革命により大量生産を推進する機械化の反動として、建築を工芸のレベルで芸術作品に作り上げようとするものであつた。建築が人間の手から離れたことに対する抵抗であつた。この運動の中心となつた人物

がウィリアム・モリスである。モリスは手芸を建築に取り戻そうとしたのである。チャールズ・レニー・マッキントッシュはその運動には参加しなかったが、その運動を意識したのは間違いない。グラスゴー美術学校の競技設計に入学し建築の実施を行うと同時に、教育者としても指導を行い、ヒル・ハウスの完成は建築の近代化に刺激を与えたのである。ヒル・ハウスの外部、内部に込められた工芸技術にはかなりの思入れがあり、人を引きずりこもうとする粘着性さえ感じる。

二〇世紀中頃に起こつたバウハウスは、建築家、ワルター・グロピウスを中心に展開された芸術運動と言える。一九一九年ワイマールで始まつたバウハウスの主題は教育と実践の両立であつた。建築、絵画、彫刻、工業製品に至るまで、異分野の垣根を越えたフォーラムが行われ、より機能性をもつたデザインの追求がなされた。デザインを社会生活の中心にすえたバウハウスの基本姿勢は、社会の要求に理解を示したことにある。ミース・ファン・デル・ローエによる建築、カンディンスキーによる構成主義的絵画等多くの教師の指導により、芸術家の登竜門となつたのである。工業と柔らかな手をつないだバウハウスの思想が今日にあって息づいているのは、社会を動かす民衆に目をやり、社会の要求にうまくあてはまっているからである。建築のモダニズムは、一般にバウハウスから出発することが正當視されているのは、深く、堅固に社会に根を下ろしているからである。このように二〇世紀の建築の動向を見ていると、建築家が建築を創つたというよりも、時代が建築を創らせているのだという構図が浮かび上がってくる。複雑なる社会的要求条

件を解きほぐす行為を繰り返す建築は、まさにその時代精神を映しだすものと考えられる。

風土から自然に生まれた建築

建築はそれが成立する場所との関わりを強くもっている。地域には場所の力を強くもつところと弱いところが現われるようだ。建築の成立と場所のコンテクストを語られることがよくある。歴史性との関連において、建築が場所に接地する限りその関係は存在する。

バルセロナにあるガウディの一連の建築を訪れたときその思いを強くした。ガウディはまさにバルセロナが生んだ建築家だと、それほどバルセロナの自然と建築が融合している。グエル公園、カサ・ミラ、サクラダ・ファミリア贖罪聖堂と眺めてゆくと周辺の建築は影がうすれてしまう。外部からの訪問者にとってはガウディの世界にどっぷりと浸り、バルセロナにいる間は抜け出せない魔性のようなものにとりつかれる。近くにあるモンセラットの山のごつごつとした岩肌から神の啓示のごとく建築へのイメージとして洗礼を受けたと語っているガウディの言葉ながら、建築の威力が感じられる。現地産の石、タイル、レンガまでは同意できるが、要所、要所にどここされた蛇、蜥蜴のアイアンワークは何を意味するのか、どう理解したらいいのか、この疑問は民族の違いなどという単なる区分けでは語れない。建築の創造とは多様な条件の重層によるのだ。

北欧にあつても地域を表す建築が成立しやすいところだ。第一に取り上げられるのは、ストックホルムの市庁舎である。ラグナル・エストベリの建築はこの市庁舎以

外あまり語られない。この市庁舎がライフワークとなる建築ということである。ストックホルムの自然の移り変わりをよく現

わす敷地に、市庁舎は風景を受け入れるように建築されている。近づくに知らぬ間に建物と一体化されてしまう。中庭、ピロティ、ホール、回廊、部屋が個性をもちながらも連体感を保っている。また現地の素材、伝統的な形態が空間構成におおいにかわっている。時を忘れさせる建築があるとするばこのような建築をいうのであろうか。多少のセンチメンタリズムをこの建築は受け入れてしまうようだ。

ストックホルム郊外にあるエーリック・グンナール・アスプルンド設計の森の火葬場は、人間の生と死を語りかける。ゆるやかな坂道を登って建築にたどりつく生きた人間のこの行為は死に対する諦念へと導かれるのである。時間を感じさせないアプローチは頂上のエントランスホールまで続いている。第一礼拝場、第二礼拝場と全く異なる内部空間があるが、それがどのようなに使われるのか穿鑿などかすれてしまう。火葬場によくある陰気なところがみじんもないのは、なだらかな丘のアクセラカントした風景が影響しているようだ。

ヘルシンキにあるアルヴァ・アアルトの一連の建築はストックホルムと少し異なっているようだ。地域性は感じられるが、さらにモダニズムを伝えている。建築は明解さを増し、直載性を多く含んでいる。建築は景観にマッチしていながら軽快に浮上している。北欧のなめらかな光が建築に映り、重量をなくしていくようである。フィンランド工科大学、フィンランドディア・コンサートホールは素材の使われ方に合理性がある。無駄がなく、単純である。合理性

は人々に合意を呼びかけ、建築に親しみやすさが伝わってくる。

ある時、近代建築を年表の上にプロットしたことがある。一九四〇年前後、建築作品の成立にポツカリと空白のところがある。第二次世界大戦に直接関与しなかつた北欧は、その間着々と名作を生み続けていた。地域性をもつ北欧の建築は近づきやすく、どこからでも入れそうだ。それは戦争の影響を受けることが少なかつた証しでもある。スイスの建築家、ルドルフ・シュタイナー、マリオ・ボッタの建築にみる近づきやすさも同じ意味をもっているからだろう。

彫刻的な建築の成立

彫刻的なもの、鉄とコンクリートによる近代建築の証は、造形性にあつて新しい可能性を示した。建築の彫刻的表現が追求されてきた。ルイス・カーンのキンベル美術館、ジョン・ウツォンのシドニー・オペラハウス、マリオ・ボッタのリヴァ・サン・ヴィターレの住宅、ヘルムート・ヤーンのイリノイ州センター、フィリップ・ジョンソンのAT&Tビルなどの建築作品には彫刻的要素を感じることができる。彫刻の抽象化が建築分野へ影響してきたのである。彫刻家ヘンリー・ムアのアーチとか、ブランクーシの鳥、エンドレスタワーには今日の建築スタイルへの記憶を呼び起こしてくる。都市の中の建築の考え方はまた、都市の中のシンボルとなる建築として語られるようになった。結果、シンボル性をより高める彫刻的建築を生み出すことになった。建築が様式の時代から遊離し、抽象化された空間により形作られるものとなつたとき、彫刻的な規範で考えるようになったのである。

ルイス・カーンの幾何学的な要素の併合、置換、相関からくる抽象性は、建築のもつ機能性を越えてしまい、彫刻的美学をたたえている。彫刻的であればあるほど、内部と外部の矛盾が生ずることもあろう。ジョン・ウツォンのシドニー・オペラハウスにその傾向が現われているが、形態の力強さは機能性を越えるものであることを証明しているようだ。多くの人々に親しまれ、都市の中の建築としてアイデンティティを伴つたとき、その建築は場所の力を将来にわたって蓄積していく。内部と外部が整合しなくとも建築として立派に存在する例は多く見かける。日本建築にもよくあることだ。例えば、法隆寺の五重塔あるいは金堂の、機能性をもたない屋根裏として二階部分を取り付けて、外観のシンボル性を保つたことは、このことをよく物語っている。

整合性がなくてもなお美しいのは、彫刻的形態からくる人々に語りかける象徴性にある。そこにはコマーションリズムが入り込む余裕はなさそうだ。現代建築は美学と経済学とのバランス感覚の上に成り立っている。どちらかが先行しすぎると、長続きしないか、ただ消費されるしかない。経済性を削ぎとられた古代遺跡は美しい建築となつて存在している。建築は遺跡を目指す、と誰かが語つたことを思い出すが、遺跡の彫刻的空間のみを捉えて現代建築空間を語ることはできない。遺跡となる以前にあるものが何かということが大切である。機能性をもちながら存続すること、使われてこそ建築と言えるのだ。ミラノ郊外にあるアルド・ロッシ設計による、集合住宅ガララテエの階高の高いピロティと、壁面の四角い窓の限らない連続性は彫刻的でさえある。あのがらんどろのピロティがいろいろ

クラフトマンシップが建築を生き生きとさせる

現代建築を構築する上で職人の位置づけは大きい。現代建築が人々を感動させることが薄れてきたと言われるのは、職人によるクラフトマンシップが建築から離れたからである。一九世紀までの建築にあつては様式というある種のスタイルによって、繰り返しにより建築を創り上げる作業が主流であつたので、多くの職人の参画が行われた。定まつた形態を密度を高めて作り、部分、部分に込めた職人のエネルギーの集合が建築を創り上げたのである。近代建築による様式の解体以降は、職人と建築の感動を呼びもどすためには、形を変換した、新しい関係による職人との結びつきこそが重要となる。

カルロ・スカルパにみる建築の部分に散りばめられた職人の技は、建築を工芸の域にまで押し進めているといえよう。カステルベッキオ美術館の床、壁、天井、窓廻り、階段、さらに絵の架台に至るまで職人の高度な技術が取り入れられている。建築における職人との新しい関係が浮かび上がる。スカルパが建築を考え出すと周辺を全く忘れてしまうほど没頭する、と言われていたのがうなずけるところである。あの部分に込められた情熱なくして職人は行動を共にしづらいのではないだろうか。おそらく職人と共に生活し、人生観さえも同一性を保

つこととなったであろう。ディテールが良いという言葉では正確ではない。ステイールプレートを決めるビス一本に至るまでが入っている。ゴットフリート・ベームのコンクリート打放し建築には隠された職人の世界がある。ペンスベルグ市庁舎、ネヴィグス巡礼教会の分厚いコンクリートを、打ち継ぎなしでどのように打設したのか。コンクリートの厚さは40cm〜60cmもある。コンクリート側圧を石のように硬質にして仕上げるために工夫をこらしたのである。型枠材は厚手の板材を使い、打ち継ぎ目地が見あたらない。ダムの子クリートの表面と変わらない。目に見えるものとして後には残らないが、型枠への情熱がコンクリートの表面に現われてくる。

デンマークの建築家、アルネ・ヤコブセンは家具デザイナーとしても有名である。家具と建築の設計を行うヤコブセンはデンマークの家具職人、金属職人の技術を生かした建築を残している。デンマーク国立銀行の外部御影石とサッシュの繊細な納まりには、建築よりも家具を見るように人間の温かさを感じる。建築が全体像を目指すと同時に部分へ、部分へと要求されるのも現代的な与件である。一方でコンセプトチュアルなものを重視し、他方でクラフトマンシップの再考を行っている。建築を文化として捉えるとしたら、この両立にありそうだ。

技術の進歩は建築の形態を変えていく
スポーツカーのメーカーとして有名なポルシェの企業理念は、テクノロジー・アンド・デザインと謳われている。

限らない時間への挑戦は、先端技術によりデザインと性能の領域を変貌させてしまった。建築にあっても同じことが言える。

に画家グスタフ・クリムトとの合作による建築である。地下食堂に設けられたクリムトの壁面はゼツェクション館の中心的役割となっている。つづいてアドルフ・ロースによるロース・ハウス、シヨイ邸他一連の住宅建築に見る非装飾性、象徴性を追求する姿勢は禁欲的なところまで高められるのである。歴史的な事件を数多く経験したウィーンは、実験的な建築思想を許容するのだ。この風潮はハンス・ホライン、フンデルトヴァッサーへと受け継がれる。画家フンデルトヴァッサーによる公営住宅は一つとして同じ窓をもたず、建築は周辺と全く調和していないにもかかわらずウィーンの市民には温かく迎え入れられているのを見ると、市民意識の許容量の大きさに驚かされるのである。建築全体にタイルを縦横に貼りめぐらし、屋上でも、バルコニーでも場所さえあれば樹木を植えて行くフンデルトヴァッサーの建築は、最近叫ばれた地球環境を擁護する一方策として、人々に受け入れられているとも言える。

メディア時代の建築の新しい波

バーナード・チュミ、リカルド・ボフィー、マノロ・ニュネズ・ヤノブスキー、レム・クールハース、コープヒンメルブラウ、ザハ・ハジド等の建築作品に表れてきた状況は今までの建築空間概念をかなり打ちくだいてしまっている。今までの建築方法論ではあてはまらない。それにイメージ的なものと新しいテクノロジーがかなり先行している。このことは情報化時代の到来とおおいに関連していることがうかがわれる。実態としての建築よりも、メディアとしての建築の影響の方が強力となりつつあるのだ。メディアの範疇に入ると、グラ

構造技術とその解析はコンピュータの導入により、空間創造の領域を広げていった。

現代建築のデザインは、スポーツカーと関連した手法と道具により新分野を開拓している。建築技術はいつの時代でも空間を構築するための設計、施工の改良を行ってきた。建築スタイルとそれを支えた技術はたえず関連性をもっていた。近代建築以降特に構造技術の開発によって建築の空間領域を広げていった。ステイール材の特性を生かした引張力による形態の追求は、建築をより柔軟で軽快にし、上へ浮遊する建築を提案した。大地にどっしりと根を生やさせた建築の考え方を変えるに至った。

パリで国際コンペが行われ世界的に知られることになったボンビドー・センターは、レンゾ・ピアノとリチャード・ロジャースの案が最優秀に採用された。この計画のユニークさは構造部材、設備部材を表面に現わしたことにある。今まで内に隠されていたものが、一番目立つところに現わされてしまった。現われた部材と部材の接合部にアルミダイキャストを挿入し、金属とガラスで覆われたボンビドー・センターは周辺を映し込み、都市風景を一変させてしまった。新しい建築が風景となつて定着してきたのは、機能性をもつ構造部材、設備部材は美しいものであるという時代の要求を受け入れているからである。

構造美学の可能性はまだ多くのものを含んでいる。コンピュータによる解析技術は構造的建築の分野を広げ、コンピュータがイメージの領域へと参入していくのである。ノーマン・フォスターによるルノールの組立工場、香港上海銀行本店に見られるように、それはステイールの引張材として外部に表現されている。ノーマン・フォスター

ンドラインさえもとばされてしまい、ながら建築を無重力状態としてしまう。建築は建築された場所の力が切断され、どこにでも、いつでも跳び越えていくようだ。その時、水平も垂直もこたわることなく存在してしまう。場所の壁はなくなり、重力をなくしてしまった浮遊する建築の姿は、メディアの中でインターナショナルスタイルを生み出している。

リカルド・ボフィー、ヤノブスキーのマルヌ・ラ・ヴァレの集合住宅は水平と垂直の都市風景を一変させてしまっている。そこに素材とかディテールに対するそれほどのこだわりはない。パリ郊外、ラ・ヴィレットに計画されたバーナード・チュミによる公園は、120m間隔に配置された真っ赤なフォリーが強烈な印象を与える。赤色は素材感をぬぐい去り、対称としてのフォルムそのものとして働きかける。建築としての赤色は情報として位置を占めている。赤色のフォリーはメッセージとして世界中を駆けめぐることになる。情報時代のメッセージは、全体よりも部分を重視するということは、ホロニズム、フラクタル美学の分野で取り上げられるところである。このことは現代社会にあつて、避けて通ることではない。この現象がモダニズムの次にくるかどうかは、大地から開放された浮遊する建築がどこに定着するかを見届けるしかないが、大きな力となつて増幅されていることは間違いない。

が機械に関心をもち機械的空間の創作を行うという設計姿勢がよく語られる。ルノールの工場も香港上海銀行本店も上空へと吊り上げられる形態をとっている。大地から浮上してしまつた現代建築の姿をそこに見ることができる。近代建築以前、建築が圧縮材としての組み立てを主たる設計手法としていたのを、引張材を主体的に取り入れることにより、建築空間の内容を変えてしまったのである。金属素材が大々的に使われることができるようになった経済的要因も、それに加わっている。金属が貴重なものと特別視されていたのが、経済的なものとして使われるようになったからである。

建築外装としての金属とガラスの組み合わせは、外装材が仕上材とだけ考えられていたところから、外部をも映し込むものとして選ばれるようになり、都市の虚像も建築空間の一部として考えられるようになった。建築の都市におけるコンテクストに別の読み方を知らせている。建築は他との関係によって成立し、ゆらぎ、うつろいへと拡大された分野まで広げられてゆく。リチャード・ロジャースのロイズ・オブ・ロンドンの入口廻り、ジャン・ヌーベルのアラブ研究所のカメラのシャッター絞りを思わせるガラスと金属のカーテンウォールは、新しい都市風景を提示している。

異分野の交流により空間の密度が高められる

異分野との交流は歴史上から見ても、たえず行われてきた。そのスタイルは時代の社会的条件を反映している。一九世紀末の建築家は主として画家、彫刻家と組み、建築の一部にうまく取り入れていた。ベルリンで活躍したカール・フリードリッ

ヒ・シンケルの設計によるシャウスピールハウスの壁面、天井面に添えられた絵画は建築空間の一部として、うまく調和が計られている。建築と絵画の境界をなくして、様式建築の近代化を計ろうとした姿勢がうかがわれる。絵画の分野でも自由なる構図、色調への読みがなされ、シンケルの建築のプロポーションに対する考え方まで変えて行くのである。シンケルの建築が新古典主義と言われるのは、そのような建築以外の分野での新しい関係をも含んでいる。

ウィーンではシンケルの影響を受けた建築家オットー・ワグナーが活躍の場を与えられる。時の国王フリードリッヒ一世のパトロネージにより活躍したオットー・ワグナーは、建築への大胆なチャレンジを行っている。近代建築のあけぼのとも言える時代のめぐりあわせである。オットー・ワグナーは新しい素材へも多くのスタディを行っている。在来からの石、鉄に加えてタイル、アルミ、ガラスの可能性を追求している。建築家が他の作家と対等に検討を行い、空間の密度を上げている。ウィーン郵便貯金局、カール広場の駅舎、カイザーバードの水門監視所でのユニット化工法は、現場の作業を減少させ、アトリエでの作業を多く取り入れ、精度の高いものとしている。オットー・ワグナーの作品紹介でよく取り上げられる、郵便貯金局のガラスによるポルト天井と、床から立ち上がる空調のダクトが船舶の内部に居るような気分になぜしてしまうのは、建築が他の分野へ手をつないでいくことを積極的に考える設計姿勢を察知させるのである。ウィーンという風土は、時にこのように自由な精神を育てたようだ。

オルブリツヒのゼツェクション館はまさ



三輪そうめん山本本社 中庭 撮影：東出清彦

狩野忠正 年譜

建築作品

【竹中工務店時代】	
1964	神戸オリエンタルホテル〔神戸市〕 詳細設計担当　設計 岩本博行
1968	東洋紡績敦賀ナイロン工場〔福井県敦賀市〕 詳細設計担当　設計 徳岡昌克
1970	EXPO70ポルトガル館〔大阪府吹田市〕 設計協力　設計FedericoGeorge EXPO70オンタリオ館〔大阪府吹田市〕 設計協力　設計DouglasCharlesRowland 信越酢酸ビニール堺本社〔大阪府堺市〕 スタンレー電気大阪支店〔大阪市〕
1971	メタボ飯急〔大阪市〕 詳細設計担当　設計 徳岡昌克
1973	ショーズビル〔大阪市〕
1975	ダイエー鹿児島ショッパーズプラザ〔鹿児島市〕 塩野義製薬福島分室〔大阪市〕 ユニチカオークタウン〔奈良県大和高田市〕
1978	清和台センターモール〔兵庫県川西市〕
1979	百合学園聖母幼稚園〔兵庫県尼崎市〕
1980	三輪そうめん山本本社〔奈良県桜井市〕 協働：山下好次 他
1984	ニッケパークタウン〔兵庫県加古川市〕 協働：砂川裕幸
1985	EXPO85国際科学技術博覧会詩人の館〔茨城県つくば市〕 日本キリスト教団池田五月山教会〔大阪府池田市〕 協働：遠藤公介 藤沢薬品筑波研究所〔茨城県筑波郡〕 協働：山根牧人
1987	ベルウイング〔長野県長野市〕 協働：高山広二 高松ライオン通りクリスタルモール〔香川県高松市〕 協働：井上正也
1988	播磨屋本店円山店〔兵庫県朝来郡生野町〕 協働：天野直樹 四条通りアーケード〔京都市〕 協働：北島元次 梅花学園澤山記念館〔大阪府茨木市〕 協働：中原文雄 奥郷屋敷〔香川県木田郡牟礼町〕 協働：野田隆史
1990	心斎橋アーケード〔大阪市〕 EXPO90花博日本画美術館〔大阪市〕 協働：砂川幸裕 クリスタルタワー〔大阪市〕 協働：本多友常
1991	淀屋橋戸田ビル〔大阪市〕 協働：門川清行 松蔭女子学院大学大山セミナーハウス〔鳥取県名和町〕 協働：林達雄 六甲アイランドシティイーストコート3番街〔神戸市〕 協働：岩下龍吉 伊丹アイフォニックホール〔兵庫県伊丹市〕 協働：天野直樹
1992	YHP神戸事務所〔神戸市〕 協働：門川清行 竹中工務店打出独身寮〔兵庫県芦屋市〕 協働：遠藤公介 ハーバーランド　ダイヤニッセイビル〔神戸市〕 協働：山内一晃 モザイク〔神戸市〕 協働：山内一晃 千里中央ツインビル東棟〔大阪府豊中市〕 協働：茨木保 西神オリエンタルホテル〔神戸市〕 協働：砂川裕幸
1993	松風ギャラリー〔兵庫県加古川市〕 協働：加部佳治 関西大学高槻キャンパス総合情報学部〔大阪府高槻市〕 協働：前田政男

1993	神戸朝日ビル〔神戸市〕 協働：山下好次
1994	三宮インテス〔神戸市〕 協働：植月真 心斎橋東洋ビル（心斎橋OPA）〔大阪市〕 協働：砂川裕幸 シーホーク〔福岡市〕　シーザ・ベリー共同設計
1995	神戸メリケンパークオリエンタルホテル〔神戸市〕 協働：砂川裕幸
1996	アクア堂島〔大阪市〕 基本設計
1997	大阪ドーム〔大阪市〕 基本設計　日建設計共同設計 阪神西梅田C街区ビル（ハービス大阪）〔大阪市〕 基本設計
〔受賞〕	
1980年	清和台センターモール
1980年	商空間デザイン奨励賞
1979年	「三輪そうめん山本本社」
1981年 吉田五十八賞　1984年 BCS賞　2014年 JIA25年賞	「梅花学園澤山記念館」
1990年 日本建築士会連合会優秀賞	「京都・四条アーケード」
1990年 グッド・デザイン商品選定証	「播磨屋本店丸山店」
1989年 BCS特別賞　1990年 日本建築士会連合会優秀賞	
1990年 大阪府知事賞　2012年 JIA25年賞	「心斎橋筋商店街アーケードの照明」
1991年 照明学会優秀照明施設賞	「奥郷屋敷」
1991年 BCS賞　1991年 日本建築士会連合会優秀賞	
1991年 褒賞銀賞	「クリスタルタワー」
1992年 BCS賞	「松蔭女子学院大学大山ロッジ」
1993年 日本建築士会連合会優秀賞	「神戸朝日タワー」
1995年 BCS賞	

【狩野忠正建築研究所時代】	
1995	長囀館〔奈良市〕
1996	円安寺〔尼崎市〕
1999	UFF〔神戸市中央区〕
2001	神戸大学百年記念会館〔神戸市灘区〕 吹田の家〔吹田市〕
2002	ケロコンシアター（S邸）〔神戸市〕 中之島公園照明計画〔大阪市北区〕
2003	南山洞禅院〔韓国釜山〕 ヨーロッパ通り（周防町）まちづくり（～2008）〔大阪市中央区〕
2004	家と庭と家（K邸）〔大阪市住吉区〕 フローリス（老人介護保険施設）〔尼崎市〕 ーObal houseー椿円の家〔大阪市大正区〕
2006	鹿籠の家Ⅰ期〔広島県安芸郡府中町〕 ぐるぐるハウス（N邸）〔大阪府寝屋川市〕 天満天神繁昌亭〔大阪市北区〕 鹿籠の家Ⅱ期〔広島県安芸郡府中町〕 空の庭（Y邸）〔大阪府大東市〕
2008	調布の広場（共同住宅・作業場・ギャラリー）〔東京都調布市〕 みどり・クリニック（Yクリニック改修）〔大阪市大正区〕 サボテニズムーSabotenismー（事務所改修）〔大阪市北区〕 浮かぶ家（U邸）〔神戸市灘区〕 輪茶輪茶庵（天満天神繁昌亭待合室）〔大阪市北区〕
2009	ナンジャモンジャの家(H邸）〔大阪府阪南市〕 箱根の家（別荘改修）〔神奈川県箱根町〕
2011	天満天神繁昌亭受付窓口増設〔大阪市北区〕

〔受賞〕
〔UFF〕
2000年 銅を用いたすぐれた建築のコンクール入賞〔神戸大学百年記念館〕
2001年 神戸景観・ポイント賞〔天満繁昌亭〕
2008年 大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）大阪市長賞
〔計画〕
〔設計競技〕
2003年　戎橋デザインコンペ、釜山エコセンター国際設計競技、大阪市住吉区複合施設設計競技、武蔵境新公共施設プロポーザル
2004年　千倉駅舎・周辺広場設計競技
2009年　国際太陽エネルギー設計競技、台北ポップミュージックセンター国際設計競技〔プロジェクト〕
2001年　K 砕石土地利用計画、塚塚山集合住宅計画
2003年　UOOLSAN CATHOLIC CENTER（韓国）、東州大学計画案（韓国）
2004年　扇町仮設劇場計画、ミナミPR館計画、Y邸計画
2006年　天神橋三丁目商店街照明計画、安国寺博物館計画案（韓国）、ウルグアイ茶室計画
2007年　月の劇場（ツリーハウス）
2008年　佐用リゾート計画
2009年　梅美台長期優良住宅新築計画
2010年　（仮称）甲子園口老人保健施設、（仮称）N複合施設、福山サービスエリア改修計画、M邸、片島計画、笹ヶ平計画、岡山湯原温泉施設計画、O邸



清和台センターモール



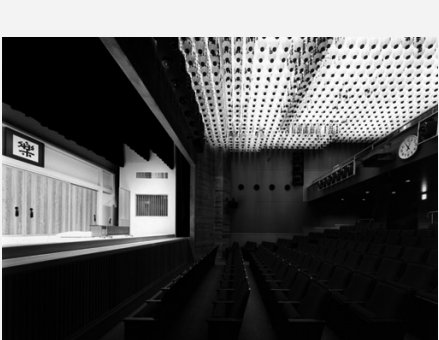
奥郷屋敷



YHP神戸事務所

著作・論文・講演会・展覧会

【主な著書】
コマーシャルスペースの計画とデザイン（1886年／商店建築社）
現代の民家（1989年／学芸出版社）
光・形（1989年／求龍堂）
建築ノート（1992年／新建築社）
建築に潜む自然（1993年／六曜社）
自然に潜む日本（1993年／六曜社）
環境デザインの視野―人・都市・自然を学ぶにあたって（2006年／澤標）
〔論文〕
「西洋の（境内）空間」ひろば1974年1月号
「タイエー鹿児島ショッパーズプラザ」SHOPAGE1975年10月号
「ユニチカオークタウン大和高田の誕生」SHOPAGE1975年10月号3月号
「茶室に学ぶ」社報takenaka1976年11月号
「原風景への思惟　外空間作家・深谷光輝氏に聞く」建築と社会1978年3月号
「境内の性格をもつ空間」建築と社会1979年3月号
「ガンダーラ」建築家1982年8月号
「建築の原形を求めて」
デルフォイの丘に立って　建築と社会1982年12月号
ヘルセボリス幻想　建築と社会1983年1月号
風のなかの難波宮　建築と社会1983年2月号
「数寄屋ー現代建築の中で」ひろば1983年7月号ー旅館ー(VS山本勝昭)
「存在の問い」建築文化1984年8月号
「科学万博　詩人の家」INAXREPORT No.57（1985年4月）
「古代のイメージ」大同銅板ニュース92号（1985年5月）
「建築家の世界」hiroba1985年1月号～12月号
12人の建築家へのインタビュー
村野藤吾・浦辺鎮太郎・海老原一郎・大江宏
東畑謙三・前川國男・吉村順三・清家清
彦谷邦一・西澤文隆・芦原義信・丹下健三
「設計の為の20のキーワード」
「現代建築と伝統技術」
磯村の仕事
傳來工房の仕事
アガタモザイクの仕事
石野瓦工業の仕事
「日本建築の伝統色10話」建築と社会1989年3月号
「店舗付住宅の設計思想」新住宅1989年9月号（鼎談）
「自然の生命につながる豊かさ　灰谷健次郎のすまいと思想・自然観」hiroba1990年7月号
「作る側・住む側も意識の改革を　都市の中の住まい　VS八束はじめ」hiroba1990年12月号
「近未来の都市と住宅」新住宅1991年1月号（座談）
「垣根をとりはらい柔軟に　遊びの心と教養ー梅神忠夫 国立民族学博物館長に聞く」hiroba1991年1月号
「狩野忠正が訪ねる知のバイオニア」
hiroba1992年1～12月号
樋口隆康・榊莫山・吉田襄助・三木善彦
庄野英二・笹田剛史・木村重信・石毛直道
森毅・伊藤郁太郎・佐藤文隆・河合雅雄
真の建築を追求する」安藤忠雄×狩野忠正・服部紀和



天満天神繁昌亭

「心を癒すこと」藤森照信×狩野忠正
「和室がシンボルになるとき」現代和風のインテリア
「クロスカルチャー」hiroba1993年1月号
「深層心理への応答　商業施設のコミュニティー広場」商店建築1994年6月号
「人間・自然・建築　詩想としての建築」竹中工務店作品集（建築画報社1994年6月）
「思索する構造設計家ピーター・ライス　岡部恵明×狩野忠正」hiroba1995年1月号
「地質学研究所　わたしのフォトメモ…タイル編」INAXREPORT117号（1995年4月）
「歴史の溝を埋める」国立国際美術館月報31（1995年4月）
「顔」嶋田勝次先生退官記念論集（1995年10月）
「island of design」建築雑誌1995年12月号
「地域の工土に根ざした新しい公共空間を　上山良子×狩野忠正」関西電力Community Information（1996年1月）
「プロジェクトとバースの関係」日本アーキテクチャルレンダラーズ協会PERSPECTIVE vol.19（1996年3月）
「打水」ニュープリンス観光バス シニユドゥベ7（1992年12月）
「二つの小空間」村野藤吾の造形意匠②階段・手摺（京都書院1994年6月）
「一瞬にして全体を見透す」
プロセスアーキテクチャー123号（1995年1月）
「草堂」hiroba1997年1月号
「探訪・狩野忠正研究所」Roof&Roofing 1997春号
「タイロギーとトボロジー」hiroba1997年6月号
「世界の屋根を考える」Roof&Roofing1997秋号
「現代建築デザインの潮流」まちなみNo.246（1998年1月）
「ゆれにおもう」建築と社会1998年10月号
「歩行者空間の充実」造景No.17（1998年10月）
「どうしても埋めておかなければならない深い溝」新建築1999年8月号
「市民は国会議事堂の上を散歩する」INAX REPORT142号
「関西の役割と可能性」大阪府建築士会50周年記念誌
「飛鳥川にやってきた聖徳太子」河南文芸（2003年8月）
「すべては劇場から始まる」河南文芸（2004年11月）
「世界の丸い家を歩く」毎日小学生新聞 2006年4月～2007年3月（月1回連載計12回）

〔講演会〕
1976　モールシンポジウム（ショップエージ社）
1980　商業施設の設計の考え方（池田商工会議所） 商店街づくりの考え方・取り組み方について（赤穂商工会議所）
1981　生活文化社会への道標（兵庫県建築士会）
1982　風景としての建築デザイン（大阪府建築士会）
1984　生活と椅子ーあなたにとっての椅子とは？（大阪府建築士会）
1984　再開発型ショッピングセンターにおける基本設計の進め方（日本ショッピングセンター協会）
1986　日伊国際シンポジウム（ヴェネツィアと大阪都市と 広場シンポジウム）
1987　現代ヨーロッパ建築の潮流（大阪芸術大学）



フローリス

1988　素材・ディテール・空間（デルファイ研究所）
1989　日本の伝統芸術のこころと建築（大阪府建築士会）
1990　これからの木造住宅建築の技術と工務店経営（大阪住宅センター）
1991　京都の伝統、その新しい道（京都インテリア産業協会'91京都インテリアショウセミナー） 景観と建築（新日本建築家協会建築文化講演会） 村野藤吾を語る（村野藤吾生誕百年記念実行委員会） 現代建築における照明の意味（遠藤照明）
1992　次世代工場はアメニティ重視（NHK教育テレビ）
1993　北欧の現代建築ーインビジブルなムーブマンとの対話（大阪府建築士会） 空間の原型（大阪西ロータリークラブ）
1994　重層する視点（兵庫県建築士会神戸支部青年部会） 景観と街なみの調和（日本建材産業協会） 視点の開放ー都市・建築への試み（兵庫県建築士会加古川支部） 建築に潜む自然ー日本建築の原点（ワタリウム美術館） 近代の再考　本多常友×狩野忠正（大阪府建築士会）
1996　「まちづくり」過去、現在そして21世紀へー武庫川と劇場の文化（宝塚市立女性センター） アート・都市・文化（阪神アートプロジェクト） 日・米・独　家具製作の現場から（樹望塾）
1997　アーツ・アンド・クラフツを考える 長谷川堯×狩野忠正 実験都市・未確定都市（大阪府建築士会） 視点の変換（ココヨ） ベルリン・ウィーンの建築（JSCA構造技術者協会） 高橋てい×藤森照信×狩野忠正（木南会シンポジウム）
1999　ベルリンの光と影（神戸大学公開講座） inside out（大阪府家具工業組合）
2000　消滅する手法（日本建築家協会） バウハウスの建築（大阪府建築士会）
2001　地域文化と建築デザイン（姫路工業大学） chusei狩野忠正を語る（神戸大学最終講義） そこから建築がはじまる（三楽会）
2002　環境としての建築（大阪府建築士会50周年記念講演）
2003　よみがえる建築（和歌山県建築士会）
2007　天満天神繁昌亭の設計（奈良県建築士会）

〔展覧会〕
1985　建築家の自邸写真展（天満橋OMMビル）
1986　関西・現代建築家の自邸PART1（銀座ポケットパーク） 彫刻と建築の空間展（アーツスペース虹）
1987　'87 光・音（アーツスペース虹）
1988　'88 TAKENAKA DESIGN OSAKA（梅田センタービルクリスタルホール）
1989　遊女の都市建築展（心斎橋バルコ）
1990　ノート'90（アーツスペース虹）
1991　TAKENAKA ART FORUM '91（竹中工務店6計画作業所） 圧縮と引張　狩野忠正による空間への試み（アーツスペース虹・信濃橋画廊）
1992　'92 TAKENAKA DESIGN OSAKA（OBPクリスタルタワー） TAKENAKA ART FORUM '92（竹中工務店ダイヤモンドタワー作業所）
1993　TAKENAKA ART FORUM '93（竹中工務店本店）
1999　都市の余白（建築家倶楽部） 沈黙する空間（ハービス大阪）
2001　住宅作家展（芦屋ラボルテ） 建築100話（意匠学会展覧会・京都市立芸術大学）
2007　Exhibition　浮遊展（中之島公会堂） Exhibition　ベルリン-大阪展（中之島公会堂）

第8回 建築人賞

主催：公益社団法人 大阪府建築士会

公益社団法人大阪府建築士会では
本誌「建築人」の Gallery に掲載された建築作品を対象に
社会性、芸術性、時代性を考慮して、顕彰、公表することにより
建築技術の進展、建築文化の向上に資することを目的として
建築人賞を実施しています。

■ 審査委員長 古谷 誠章（早稲田大学教授）



1955年 東京都生まれ
1978年 早稲田大学理工学部建築学科卒
1980年 早稲田大学大学院修了
1986～1987年 文化庁芸術家在外研修員として
マリオ・ボッタ事務所在籍
1994年～ 八木佐千子とスタジオナスカ（現NASCA）
共同設立
1994年～ 早稲田大学理工学部助教授
1997年～ 早稲田大学教授
本年度より建築人審査委員長

■ 表彰（設計者に対して） 建築人賞 （賞状と記念盾） 建築人奨励賞（賞状）

※建築主・施工者には感謝状授与

■ 第8回 対象作品

「建築人」2015年1月号から2015年12月号まで
Gallery に掲載された建築作品

※建築種別、建築地を問わない。但し、竣工検査済証を受けたもの

■ 審査方法（2段階審査・予定）

一次審査 建築人誌面、公開プレゼンテーションにより選定
二次審査 現地確認により選定

■ 受賞発表

建築人2016年7月号誌面（予定）

■ 問い合わせ

公益社団法人大阪府建築士会「建築人賞」係
TEL 06-6947-1961 FAX 06-6943-7103



建築人賞 記念盾 「未来へ！」
ガラスアーティスト 三浦啓子作

『建築人』Gallery 掲載作品 募集中 2015

会報誌「建築人」では、Gallery に掲載する作品を
募集しています。

【掲載料】

カラー 2ページ 20万円
カラー 1ページ 10万円
モノクロ 2ページ 10万円
モノクロ 1ページ 5万円

※モノクロページは住宅に限ります。

詳しくは、公益社団法人大阪府建築士会「建築人」
Gallery 建築作品掲載係まで。

二〇一四年十二月、東京駅は竣工から
一〇〇年という節目を迎えた。これを記念
して、先ごろ駅舎構内にある東京ステーション
ギャラリーで、「東京駅一〇〇年の記憶」
と題する展覧会が開催された。考えて見れ
ば、めまぐるしく激動を続けてきた東京の
中心にありながら、中央駅として現役のま
ま、一〇〇年という時の蓄積を果たしたこ
と自体、奇跡にも思える。一方、世界史に
眼を転ずれば、竣工した一九一四年は、国
民を巻き込む史上初の総力戦となった第一
次世界大戦の勃発した年である。すなわち、
それは、東京駅が日本近代一〇〇年の貴重
な目撃者でもあったことを意味する。

で、東京駅は取り壊しの危機に幾度となく
晒されてきた。一九八七年、多額の赤字を
抱えた国鉄が分割民営化される。そして、
これを受けて、バブル経済を背景に東京駅
とその周辺を再開発する計画が動き出し、
東京駅は最大の危機を迎える。しかし、こ
の時、共に戦後を歩んだ東京駅に思いを寄
せる有志が立ち上がり、「赤レンガの東京
駅を愛する市民の会」を結成し、粘り強い
保存運動をスタートさせる。一〇年以上に
及ぶその地道な活動が実を結んだ成果なの

歴史がある。（中略）最近では東京ステ
ーションホテルが改装された。改装前の面影
はほとんどなく、東京デイズニールランド駅
とでも呼びたくなるような、作りものっぽ
さが目立つ姿になってしまった。（レジ
ス・アルノー「東京に残る伝統美を「破壊
者」から守れ」『ニューズウィーク日本版』
二〇一四年八月一日号）

「問題は、東京駅を現在のまま残すのか、
戦前の姿に戻すかということである。辰野
葛西建築事務所的设计した東京駅が健在で
あったのは三十一年間にすぎないが、戦災
復旧後の姿ですでに四十五年が経つ。一つ
の建物を残すことは、その建築が経験して
きたすべての時代の痕跡を尊重することか
ら始まる。（中略）戦災復興の工事は多くの
人々の努力の結晶であるし、また戦後の東
京駅には市民によって親しまれてきた歴史
もあるので、慎重な扱いが必要である。」（「赤
レンガの東京駅」岩波ブックレットNo.288）

記憶の建築 松隈 洋

東京駅 1914 年
日本近代 100 年を目撃した駅舎の今



復元工事前の東京駅丸の内北口の外観



「丸の内駅舎が甦る」と書かれた仮囲いと解体直前の東京中央郵便局

だろう。二〇〇三年には、東京駅は、晴れ
て国の重要文化財に指定される。そして、
五年の歳月をかけて耐震改修と復元工事が
施され、二〇一二年に創建時の姿に甦った。
こうして、新生した東京駅は、たくさん
の人々が訪れる観光名所にもなっている。
けれども、その一方で、ある外国人記者は、
その姿を次のように酷評したのである。

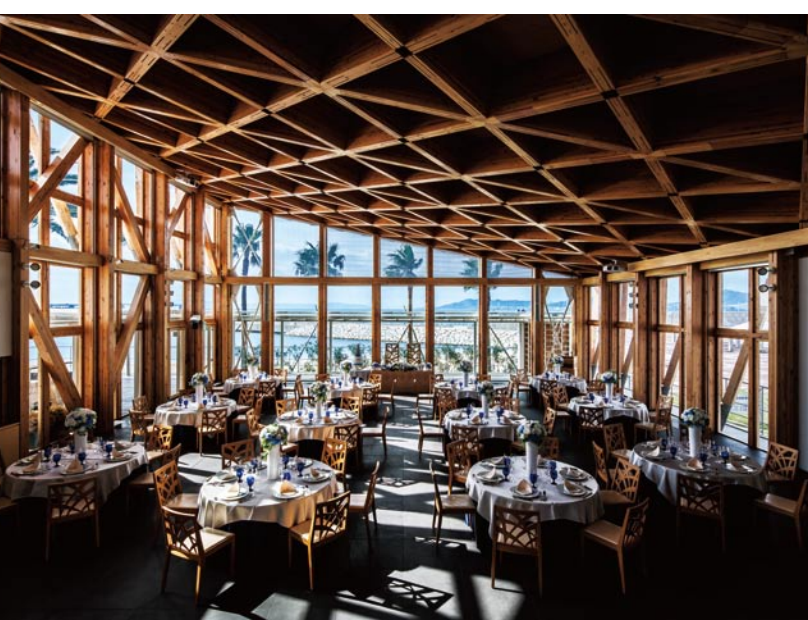
「東京には長年にわたる「リノベージョ
ン」の名を借りた「文化・芸術の破壊」の

角屋根に慣れ親しんだ経験と、復元工事直
前の二〇〇五年に東京ステーションギャ
ラリーで開催された、「生誕一〇〇年前川國
男建築展」に携わったこともあって、復元
された東京駅の姿に、私自身も違和感を覚
える。何かが失われた感覚がどうしても拭
えないからだ。赤レンガの保存運動に代
表委員として加わった建築史家の稲垣栄
三（一九二六～二〇〇一年）は、最中の
一九九二年に、東京駅の歴史的価値を論じ
た文章の中で、「外観をもとの姿に復元す

ここには、東京駅の生きられた歴史をど
うとらえるのか、という視点が提示されて
いる。東京駅は、一九〇五年の日露戦争の
勝利をきっかけに国家の威信の象徴として
建設された。しかし、その後の震災と戦災
によって傷つき、戦後に入ると、むしろ、
市民と共に歩む民衆駅として親しまれてき
たのである。その歴史全体をどう理解し、
その延長に何を施し、どういう形に手を入
れるのか、が問われていたのだと思う。気
がつけば、二〇〇〇年代に加速した都市の
再開発によって、東京中央郵便局や丸ビル、
新丸ビルなど、東京駅と共に街並みを形づ
くってきた周囲の建築群はすべて超高層ビ
ルに建替えられていた。唯一残った東京駅
は、その喪失感を今も問い続けている。

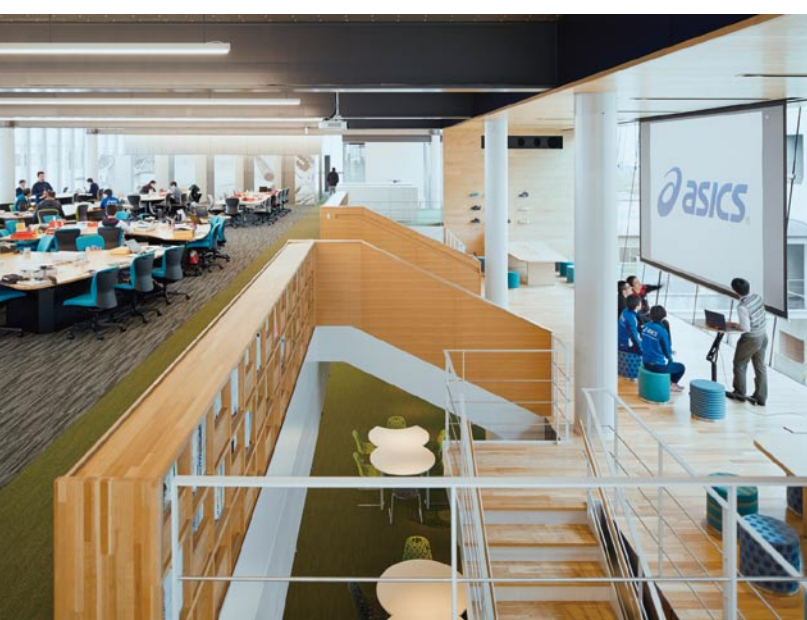
松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。
一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京
都大学卒業後、前川國男建築設計事務所
に入所。二〇〇八年十月より現職。



神戸空港島に位置する西日本最大級のウェディング施設であるラヴィマーナ神戸のレストランの増築である。リゾートウェディングをテーマとしたこの施設は年を追うごとに樹木も成長し、建築当初からより異国感を漂わせ、他の追随を許していない。今回の増築も基調のテーマを維持しながら、更に他で見たことがない様なオンリーワンの建築を目指している。木造ラティス構造を採用した、14Mx27Mの無柱のレストランは劇場型レストランと銘打って、テラスのあるフロアに100名、半層上りのフロアに50名、合計で150名を収容することができる。どちらの席からも西面の海と空とサンセットをゆったりと楽しむことができる。

所在地：神戸市中央区
用途：レストラン
竣工：2014.9
構造規模：W造一部RC造
地下1階
地上2階
敷地面積：1,500㎡
建築面積：640.48㎡
延床面積：1,282.14㎡
写真：笹倉洋平



スポーツ用品メーカーの研究所の増築である。建築主の創業哲学「健全な身体に、健全な精神があれかし」をコンセプトに、合理的な架構のスケルトンデザインと運動行為を誘発する建築計画により、知的創造性を高めるワークプレイスを目指した。外装を彩るガラスファインは日本の伝統色を用いて日本企業としてのアイデンティティを発信し、同時に日射と視線の柔らかな制御を行っている。不要な仕上げを極力絞ったスケルトン空間は、スポーツアスリートの身体美を表現し、同時に自然素材の活用と、内外部が連続するテラス等外部環境の内部化を図ることで、新たな創造の場となることを意図した。

(日野宏二、松浦真樹)

所在地：神戸市西区
用途：研究所
竣工：2015.01
構造規模：鉄骨造
敷地面積：16450.06㎡
建築面積：1138.91㎡
延床面積：3361.66㎡
写真：古川泰造



三方を隣地に囲まれた敷地は形状が正方形で、一定の離隔を確保した結果、建物形状も正方形になりました。
一間半をモジュールとし、四畳半を最少単位とした割付を行い、3x3モジュールの内2x2を占める吹抜のリビングを中心に内部と外部に広がる構成としました。吹抜に接するL型の内部2層に個室や水廻りの機能を持たせ、外部に張り出した浮いたテラスやエントランスのボリュームに内外を繋ぐ役割を与えました。
屋根対角線上の片勾配の棟木に、垂木状の梁が集まる様子が表しとなった天井は、シンプルな構成のこの建物に静かな規律とリズムをつくっています。

所在地：大阪府堺市
用途：専用住宅
竣工：2015.02
構造規模：木造2階建
敷地面積：206.93㎡
建築面積：82.10㎡
延床面積：117.80㎡
写真：富田英次

敷地は奈良の高級ベッタウンとして閑静な住宅地が広がる近鉄学園前駅近郊に位置する。その敷地周辺との素材を連続させた外観は、暖かみのある杉型枠コンクリートと白い左官壁を採用することで、建物全体の単調さを無くし、奥行きと変化を街並みに与えた。家族の集まるリビングの開口部は、全開にすることで開放的な外部空間と一体となり、水面にモミジが色づく敷地の高低差を生かしたSTAGEへと繋がってゆく。その場合は、季節ごとに訪れる変化や、空間に回遊性を与え、リビングから徐々に階上へと広がる空間はそのまま空へと伸びやかに繋がってゆく。木々に集まる小鳥や風が四季の移り変わりを伝え、家族を笑顔にしてゆく住まいとなった。

所在地：奈良県奈良市
用途：専用住宅
竣工：2011.12
構造設計：木構造建築研究所 田原
構造規模：RC造2階
敷地面積：354.84㎡
建築面積：160.34㎡
延床面積：228.71㎡
写真：下村康典

2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波から10年がたちました。今号は、インドネシアの地域研究を専門分野とするなかで、「デジタル・アーカイブ」という手法を用いて災害地と向き合ってこられた京都大学地域研究統合情報センターの山本博之さんと西芳実さんにご紹介いただきました。「過去と今を比べ、そこからさらに未来を思う」という災害復興への思いです。

被災地写真のアーカイブー景観の変化を記録し記憶を紐づける

山本 博之

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門は東南アジア地域研究（災害対応と情報）。著書に『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』（京都大学学術出版会、2014年）、共編著に『国際協力と防災——つくる・よりそう・きたえる』（同、2015年）など。

西 芳実

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はインドネシア地域研究（紛争・災害と復興）。著書に『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（京都大学学術出版会、2014年）、共編著に『記憶と忘却のアジア』（青弓社、2015年）。

災害対応の地域研究

私たちは、二〇〇四年一二月に発生したスマトラ島沖地震・津波の最大の被災地となったインドネシアのアチェ州で、被災から現在までの約一〇年間にわたって被災地の景観を撮りため、それをインターネットの地図上で参照できるようにした。

私たちが専門とする地域研究とは、政治学や経済学や社会学などのように特定の分野を専門とするのではなく、特定の地域を専門として、その地域社会について多面的に理解することを通じて、現代世界が抱える諸課題を地域に根ざして考えようとする学問分野である。研究テーマは業種や分野を超えて取り組まれる課題になることも多い。

私たちが「災害対応の地域研究」に取り組むようになったのは、スマトラ島沖地震・津波がきっかけだった。被災地で異業種・異分野の専門家に同行して、それぞれの分野の調査や取材の方法を間近で見たことでその影響を受けながら、研究対象地域が未曾有の大災害により甚大な被害を受けたとき、地域研究者として何ができるのか、研究成果を誰にどのような形で伝えるべきかを考えることになった。

被災地の景観を撮る

津波直後の被災地調査では、工学の専門家であるHさんに同行した。Hさんは、被災地でとにかくたくさん写真を撮影していた。壊れた建物。唯一残された土台からわずかに延びた鉄筋の曲がり具合。大きさを比較するためにタバコの箱を置いて撮る。位置や向きを記録も大事だとの話だった。

携帯電話のGPS機能が未発達で、カ

メラに外付けのGPS装置をつけて撮影する時代だった。Hさんは、車で被災地を走りながら、数秒おきにシャッターを切っていた。それを見て、私たちも同じように写真を撮ってみた。デジタルカメラなのでフィルムを気にしなくてよいため、車中でメモリとバッテリーを交換しながらシャッターを押し続けた。

帰国して写真を整理していると、撮った本人の目には写真と写真の間の風景が思い浮かぶので被災地の様子が動画のように思い出されるけれど、被災地に行つたことがない人の目には写真と写真の間の風景は存在しないことがわかった。被災地では壊れた建物ばかり撮りがちだが、そうすると、写真だけ見ていると現地には壊れた建物しかないような印象を与えてしまう。実際には、津波でほとんど全ての建物が流されてしまった地区もあれば、一階部分が水に浸かったけれど建物は残った地区もあり、被災地は決して一様ではなかった。

壊れた建物だけ撮っていたのは被災地の様子を伝えられないと思い、次の訪問では壊れていない建物も撮るようにした。車窓から山と木々しか見えないときでも撮り続けた。こうして、毎年二・三回被災地を訪れ、車での移動中もシャッターを切り続ける調査が始まった。二〇〇六年にはソニーのGPSキットが発売され、デジタルカメラで撮影した写真に位置情報をつけることが容易になった。

被災地では人道支援や報道の専門家に同行する機会もあった。写真の撮り方で特に参考になったのは報道写真の撮り方で、被写体に焦点を当ててまわりの部分は大胆に切り捨てていた。心を動かすために顔を撮るのだと言う。埋葬地で礼拝

景観を見て、何が情報として重要だと思つたのか。そのもとにあったのは、あまりに被害の規模が大きく、「死者・行方不明者は一七三〇〇〇人」「この集団埋葬地に埋葬されているのは二万體」というように、災害の犠牲になった人々を数で扱わざるを得ない災害の現場を実際に訪れてみて、犠牲になった人々や生き残つて犠牲者を思いながらこれからの生を全うしようとする人々には、数字にまとめられないそれぞれの経験があるという実感だった。

災害の経験を教訓として残すには、個別の文脈を落として誰にでもわかる簡単な形にすること、具体的に細かい事実からなる個別の物語を記録しておくことの両方が大切である。後者のためには一人一人の物語を聞いて集めていくしかないが、災害直後で、しかも被災者の数が膨大で、とても個別に話を聞いていくことは不可能だという現実の前で、さしあ

している女性やそのまわりで遊んでいる子どもたちの笑顔をとてもうまく切り取っている。確かに、一枚一枚が共感を誘う。いつ誰が見ても心を打つ写真とは、情報を削ぎ落とし、個別の文脈がなくても伝わる写真なのだったと思った。

報道写真の焦点の当て方に学ぶ一方で、被写体に大きく焦点を当てる写真を撮ると、それがどのような状況で撮られた写真か背景がわからなくなると感じた。それは報道写真の役割であって、地域研究者はむしろ焦点を絞らずに、背景を含めた全体像がわかるような写真を撮るべきだと思うようになった。

景観から記憶を紡ぐ

何度も現地を訪れるうちに街並みの経年変化が見えてきた。ただし、記憶に頼つて写真を撮っていたため、正確に同じ場所で撮つた写真はそれほど多くなかった。このようなときに出会ったのがメモリーハンティング（メモハン）というスマホアプリだった。メモハンを使うと、以前撮つたのと同じ場所で撮影することが容易になる。メモハンに参加することで、過去と今を比べ、そこからさらに未来を思うという営みに複数で参加することが可能になる。アチェの街頭でメモハンを行っていて、津波以前のアチェの街並みを撮り続けてきた郷土史家と出会い、撮りためた写真の提供を受けた。これにより、現在の景観の中に津波後だけでなく津波以前の風景を探すこともできるようになった。過去の写真は過去のことを知るだけでなく、今を生きる人たちにとっても必要なのである。

写真は、文化や地域や時代が違ついても、見ればわかるという特徴がある。

たりできる方法として、一歩引いたところ写真撮り、誰もが見えるところに公開することで、人々が自分の物語を引き出す手がかりを残しておくことができるのではないかと考えた。

私たち地域研究者が行っているのは、災害対応に即して言えば、地域社会の情報バックアップである。地域社会を構成するのは人々、財物、景観、記憶などであり、人はそれを地の上に積み重ねること文化空間を築いてきた。災害は、建物や景観を壊すだけでなく、建物や景観に紐付けられていた記憶も壊し、文化空間を更地にする。文化空間を復興するには、建物や景観を物理的に復旧再建するだけでなく、かつての記憶を掘り上げて、新しい景観に新しい記憶を紐付けていく必要がある。被災地写真のアーカイブは、被災地の内外の人が景観に共通の経験や記憶を紐付けていく試みの一つである。



阪神淡路大震災から20年目を迎えた神戸市で大阪府立北野高校スーパーグローバルハイスクールの高校生と共にメモハンをするインドネシア人学生



メモハンした結果はウェブ上でも閲覧できる。上は阪急会館前の様子。中央のスライダーを動かすと被災直後と現在の写真を比較できる。詳しくは <http://dsr.nii.ac.jp/memory-hunting/> を参照。

文化空間の復興に向けて
振り返ってみて、これほど多くの写真を撮りためることで、私たちはいったい被災地の何を記録し、何を読み取り、何を伝えようとしているのか。私たちは、急速に移り変わっていく被災地の



スマホ・アプリ「メモハン」でスマトラ島沖地震・津波の被災から10年目を迎えたインドネシア・バンダアチェ市で被災直後（上）と同じアングルで現在の様子（下）を撮影する。

新しい動きをとらえてー工場移転跡地利用とこれからの茨木市づくりー

文 大塚 康央

はじめに

本市は、平成二六年度に「第五次総合計画」の策定と、都市計画マスタープラン（都市計画に関する基本的な方針）の改定を、ともに連携、調整しながら、行った。

この、まちづくりに関する基本的な計画検討を進める時、都市整備担当部として意識して取り組んできたことから、本稿を始めることにしたい。

なお、私見にもとづく部分もあることはご理解いただきたい。

大きな変化を受けて

話は、昭和三〇年ころにさかのぼる。当時の茨木市は、昭和の大合併に伴う行政需要の増大、ドッジ・ラインによる地方財政の逼迫の中で、財政赤字が増え続け、昭和三十一年に赤字再建団体に指定された。昭和三〇年度の状況を紹介すると、歳入が二三九百万しかなかったのに対し、歳出は三九〇百万、実に歳出額の六割しか歳入がない状態であった。

その後、赤字再建団体を脱する昭和四一年までの約一〇年間、財政赤字脱却のため血のにじむ取り組みが進められた。

その根幹となる政策が「工場誘致」であった。公害の心配が少ない加工や食料

品などの工場誘致が進められ、松下電器、東芝、日本ビール（現サッポロビール）などが一〇〇二〇ヘクタールの規模で本市に立地した。その後、わが国の高度経済成長も相まって、本市の経済と雇用を支え、発展と成長の原動力となってきた。

茨木市が、単に住むためのベッドタウンではなく、働く場所としての機能を備えた都市となったのは、この頃の取り組みによるものと、私は理解している。

この工場誘致に市をあげて取り組んでいた時期から約五〇年経過した。経済はグローバル化し、国際的な競争が激化、生産の効率化等の要請が強まる一方、工場そのものの老朽化が進む。本市においても、昭和三〇年代に誘致した工場が、平成二〇年前後に廃止、移転するという事態が発生した。

工場誘致状況		
年度	誘致工場名	面積 (ha)
昭28	松下電器産業(株)	13.0
	愛知トマト(株)	4.3
29	高橋工業(株)	0.8
	日本ビール(株)	9.9
30	理研合成樹脂(株)	3.3
	日本専売公社	8.3
31	日本計算機(株)	1.3
	日世工業(株)	2.1
32	(株)寺岡製作所	5.3
33	(株)吉野工業所	1.1
34	東洋製罐(株)	9.1
	東京芝浦電気(株)	24.0

出典：茨木市議会四十年史

改定前の都市計画マスタープラン（以下「旧マスタープラン」という。）は、平成一六年度から三年かけて取り組み検討し平成一九年に策定したものであるが、この旧マスタープラン策定時点では、このような動きは想定していなかった。

それだけでなく、本市の再生と発展を支えてきた工場が本市からなくなるということは、市のまちづくりの転換期を迎えているとの思いを抱いたところである。

まちづくりのチャンスに

大規模な工場の廃止、移転は、空地が発生するだけでなく、地域経済、雇用など、都市機能に大きな影響を与える。跡地の利用は、茨木市のこれからを左右しかねない重要な要素となる。

土地所有者をはじめさまざまな関係者と意見交換しながら取り組んできた。

この大規模な工場の移転・廃止が進み、跡地利用が大きな課題となっていた平成二〇年にリーマン・ショックを迎えることになる。経済環境的には、例えば大規模商業施設や団地などの開発を一気に進めるという雰囲気でなくなった。これは、一方で、工場跡地の利用について、さまざまな可能性を探る時間的な余裕ができたということとも言えるかもしれない。



いばらぽの様子

ている。また、芋をテーマに和洋菓子店などとコラボした茨木スイーツフェアなど、さまざまな協働の取り組みが進んでいる。ここに、立命館大学と学生という新しいアクターが加わることになる。すでに、学生たちは、本市での活動をスタートさせ、茨木の魅力を発見し、紹介する取り組みも行われている。

都市整備部においても、これまで実施してきたまちづくり寺子屋、まちづくり塾を発展させる形で、大学と密接に連携・協力した「いばらぽ（いばらきまちづくりラボの略）」をスタートさせた。これは、ゼミ形式で、いくつかのテーマを設定し、立命館大学政策科学部と連携し、多くの先生方のアドバイスを情報提供などを受けながら、研究を行い、成果をまとめるというものである。

平成二六年度は、「食と農」、「防災」、「市北部地域の魅力向上」という三つのテーマで研究が行われ、成果が発表された。まとめられた内容もすばらしいもの



建設が進む(仮)JR 総持寺駅付近（京都方面から望む）

例えば、立命館大学関連で言えば、JR 茨木駅東口、キャンパス周辺の道路、キャンパスと一体となった公園（UR の防災公園街区整備事業を活用）の整備を進めるだけでなく市民に開かれたホール、図書館等を有する立命館いばらきフューチャープラザを、立命館と事業費を負担して建設に取り組んできた。また、（仮）JR 総持寺駅及び周辺整備は、JR 西日本、駅前で共同住宅等の開発を進める民間事業者と協力して取り組んでいる。

協働の新たな展開

ここで、平成一九年に策定した旧マスタープランに触れておきたい。旧マスタープランは、丁寧な市民参加により策定してきた。特に、第一部としてまとめている「基本理念」や「まちづくりビジョン」は、参加市民により書き起こされたものである。描かれた基本理念は「人力タウン」、人の力を活かし、人の活動が活発に展開される生き生きとしたまちの姿を描いたものであった。

これからは、人の能力や活動が、都市の活力を支える時代になりつつある。これを先取りするかのように、市民がまとめた基本理念は、改定したマスタープランでも受け継ぐことにした。

本市の都市整備分野における住民参加は、旧マスタープラン策定以前から、都市計画に関する知識の普及・啓発などを目的に、講義型のまちづくり寺子屋、ワークショップ型のまちづくり塾などを実施してきた。一方で、商工団体や市内に立地する大学、高校なども、それぞれ、まちづくりに積極的に関わっていただい

だったが、特筆すべきは、市民間のネットワークが、大学を含むネットワークに発展していること、さらに、市民の思いが反映した研究成果を、実際に実行してみるという計画が進んでいる。「考える」から「実行」へ、ステップアップが行われようとしている。

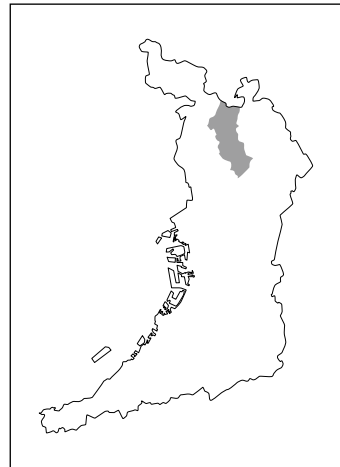
終わりに

このように、茨木市のまちづくりは、これまでの取り組みを礎にしながら、新たなアクターを迎え、協力・協働の関係も、より密接に、また、具体的なものへと進化しつつある。

この動きを止めることなく、市に関わる多くのアクターの連携・協力を深めながら、これからの時代をリードするまちづくりを進めていきたいと考えている。

大塚 康央

茨木市都市整備部長 技術士建設部門
一九五八年 茨木市生まれ
一九七九年 茨木市へ入庁
大規模プロジェクトの推進、都市計画等に携わる
二〇〇九年 四月から現職



立命館大阪いばらきキャンパス（毎日新聞社提供）

第34回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ賞)入賞作品

◆表彰目的 周辺環境の向上に資し、かつ、景観上優れた建物や建物を中心とするまちなみを表彰することにより、個性と風格のある都市景観の形成に寄与するとともに、都市景観に対する意識の高揚を図ることを目的とする。

◆対象 大阪府域内の建物（平成21年8月16日から平成25年7月31日までに完成したもの）及び建物を中心としたまちなみ（平成25年7月31日までに完成したもの）で、一般の方々から推薦を受けたもの。

◆審査委員 ※50音順 審査委員長*

指田孝太郎(建築) (公社)大阪府建築士会相談役	渋谷 卓司(報道) 毎日新聞大阪本社編集局社会部長	下村 泰彦(造園) 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授
中嶋 節子(建築) 京都大学大学院人間・環境学研究科准教授	夏原 見子(デザイン) 美術造形デザイナー	久 隆浩*(都市計画) 近畿大学総合社会学部環境系専攻教授
藤本 英子(芸術) 京都市立芸術大学美術学部デザイン学科教授	本多 友常(建築) (一社)日本建築協会副会長／摂南大学理工学部住環境デザイン学科教授	

大阪府知事賞 グランフロント大阪



建築位置：大阪市北区大深町
完成年月：2013年3月
主用途：オフィス、ナレッジ、商業、コンベンション、シアター、ホテル、サービスレジデンス、住宅
建築主：NTT都市開発㈱・㈱大林組・オリックス不動産㈱・関電不動産㈱・新日鉄興和不動産㈱・積水ハウス㈱・㈱竹中工務店・東京建物㈱・日本土地建物㈱・阪急電鉄㈱・三井住友信託銀行㈱・三菱地所㈱
設計者：㈱日建設計＋㈱三菱地所設計＋㈱NTTファシリティーズ
(実施設計では㈱大林組、㈱竹中工務店と協働)
うめきた広場基本デザイン・デザイン監修：安藤忠雄建築研究所
施工者：梅田北ヤード共同企業体（㈱大林組、㈱竹中工務店）
撮影者：村井スタジオ

〈講評〉
梅田貨物駅の再開発で生まれた約24haの新都心地区は、エリアマネジメントによって生み出された統一感あるハイグレードな景観をつくりだしている。すべての建物は地上45mの高さで表情を揃え、低層部の景観を整えている。また、そびえ立つ4本のタワーは、南側のオフィス棟を先進性あふれるガラス建築に、北側のホテル・マンション棟はアースカラーで素材感を出すことで温かみを醸し出すなど、用途に合わせたデザインを施している。さらに道路と敷地のセットバック部と合わせ、ゆったりとした歩行空間を生みだし、オープンカフェによって賑わい景観をつくりだしている。（審査委員長 久 隆浩）

審査員特別賞 大阪木材仲買会館



建築位置：大阪市西区南堀江4-18-10
完成年月：2013年3月
主用途：事務所
建築主：大阪木材仲買協同組合
設計者：㈱竹中工務店
施工者：㈱竹中工務店
撮影者：母倉知樹

〈講評〉
木材を取り扱う仲買協同組合の会館の建て替えて、かつて大坂の木材問屋が軒を連ねた長堀に近い場所に立つ。樹齢50年を超える既存の二本の桜を、まちなみの風景を継承する主役として据え、根を傷めないよう建物外壁面を凹面状に控えて、まちなかのちよとした森となっている。耐火性・防火性・メンテナンス性等、都心での木造採用に伴う多くの課題を見事に乗り越えた力作で、丁寧につくり込まれた、質の高い、心地よい建築である。（審査委員 指田孝太郎）

大阪市長賞 ダイビル本館・中之島四季の丘



建築位置：大阪市北区中之島3-6-32
完成年月：2013年2月
主用途：事務所・飲食店舗・物販店舗・自動車車庫・地域冷暖房
施設・地下通路
建築主：ダイビル㈱・関電不動産㈱
設計者：㈱日建設計
施工者：㈱大林組
撮影者：東出写真事務所

〈講評〉
大大阪の時代を象徴する近代建築・ダイビル本館（1925年竣工・渡辺節）が、中之島の新しいランドマークとして建替えられた。低層部北面と西面は当初材料を再利用して復元的に再現。高層部を軽快なガラスのカーテンウォールとすることで、旧ダイビル本館の記憶を継承しつつ現代的なスカイラインを描く。周辺敷地との関係性を重視して計画された足元では、壁面のセットバックによって生み出されたオープンスペースが賑わいを誘引するとともに、敷地西側に設けられた丘状の緑地・中之島四季の丘が豊かな緑をまちに提供している。（審査委員 中嶋節子）

緑化賞 旧桜宮公会堂



建築位置：大阪市北区天満橋1-1-1
完成年月：2013年3月
主用途：結婚式場
建築主：㈱ノバレーゼ
設計者：㈱竹中工務店
施工者：㈱竹中工務店
撮影者：ナカサアンドパートナーズ

〈講評〉
本施設は、都市公園内に位置する施設であり、玄関ファサード部分が重要文化財に指定されている。現在、ブライダル施設等として生まれ変わったが、同敷地内の泉布観と相まって、歴史的・文化的な雰囲気醸し出している。敷地内では、既存のソメイヨシノ、イチヨウの巨木を適切に保存するのみならず、建物西側の日本庭園を復元し、樹木を積極的に保全・管理している点や、庭園での回遊性の確保、東側での造幣局側から大川に抜ける南北軸の動線確保等が評価された。（審査委員 下村泰彦）

主催 大阪府・大阪市・(公社)大阪府建築士会・(一社)大阪府建築士事務所協会・(公社)日本建築家協会近畿支部・(一社)日本建築協会

◆審査総評

本年の審査対象64件（建物59件、まちなみ5件）から、例年通り審査資料にもとづいた1次審査で12件を選出し、現地審査による2次審査を行った。今年は質の高い建築物が多く、奨励賞を受賞したものの中にも他の年であれば大阪府知事賞、大阪市長賞、審査員特別賞といういわゆる三賞を受賞してもおかしくないレベルのものもあった。第二次選考の現地審査に残った物件は12件あり、最終選考は時間がかかると思っていたが、意外にすんなりと選考できた。それは三賞に選ばれた作品が他にくらべ抜きん出ていたということである。

その中でも大阪市長賞を受賞したダイビル本館・中之島四季の丘は審査員の満票を獲得した。「知事賞と市長賞はどちらが格上か」という質問が委員からあったが、例年両者は同等なものとして審査しており、1920年代の大大阪時代を象徴する建物の建て替えであり、大阪市を代表する建築物であるとの評価から市長賞に決定したものである。今年は、ダイビル本館、中之島フェスティバルタワーといった名建築の建て替え物件が複数ノミネートされたが、受賞状況がそれぞれの質を反映している。ダイビル本館は旧建物の部材を一旦ストックし、新建物にふんだんに活用している。こうした手間、そして費用のかかる作業をあえて選択したオーナーに敬意を評したい。

また、大阪府知事賞を受賞したグランフロント大阪は、大阪駅前という大阪の顔となる場所に、エリアマネジメントによって質の高い作品をつくったことが、大阪全体の景観イメージに多大な貢献をしている。さらに、建築デザインとして秀逸な物件を表彰する審査員特別賞に選定された大阪木材仲買会館は、大阪木材仲買協同組合の事務所兼展示スペースとして、木材の利用促進や都市部における木造化ビルの普及をめざしたものであり、今後の都市景観の新たな方向性を示唆したものとなっている。

緑化賞を受賞した旧桜宮公会堂は、建物自体は公会堂をそのまま利用しており、リノベーション物件が景観賞に値するかどうかの議論があったが、リノベーションの際に今まで手つかずであった敷地内の庭園を再整備したことが緑化への貢献に値することで受賞に至ったものである。

今回は敷地規模の小さな物件が受賞しなかったことが残念である。まちなかにはきらりと光る建物があるはずだが、推薦されない限り選考の組上には上がらない。来年以降は小規模でもきらりと光る物件のノミネートを期待したい。

奨励賞 木の実幼稚園



建築位置：松原市天美北3-10-18
完成年月：2012年10月
主用途：幼稚園
建築主：学校法人 今川学園
設計者：(有)モノスタ'70（撮影者共）
施工者：㈱林建設
〈講評〉
形も構造も意匠も異なる園舎は成長の変遷を物語っている。その敷地に白い箱の鉄骨造と黒い木造が挿入され、新たな混在が生みだされている。一般的な「デザインポリシー」の概念においては拡散的なまちなみを助長し、一見したところデザインワークとしての論理性は見出しにくい。しかしそれが狙いであったのだろう。結果的に多様な隙間を生み出しており、道に対し幼稚園の溢れ出しを押し出している点で、巧妙なまちなみ形成の提案となっている。（審査委員 本多友常）

奨励賞 東大谷高等学校泉ヶ丘校舎



建築位置：堺市南区三原台2-2-2
完成年月：2013年3月
主用途：学校
建築主：学校法人 大谷学園
設計者：㈱竹中工務店
施工者：㈱竹中工務店
撮影者：稲住泰広

〈講評〉
敷地の蛇籠の壁、建築空間を包み込むレンガの透かし積み、優しい色使いの外壁タイルなど素材使いの魅力がそのまま建築の魅力に繋がっている。強調された外観の水平線が既存地形に寄添う構成を引き締める。生徒手植えによる天然芝グラウンドなど生徒の活動も伝わる空間だった。（審査委員 藤本英子）

奨励賞 IDEC本社・技術研究センター



建築位置：大阪市淀川区西宮原2-6-64
完成年月：2013年3月
主用途：事務所
建築主：IDEC ㈱
設計者：鹿島建設㈱
施工者：鹿島建設㈱
撮影者：松村芳治

〈講評〉
南北に新しい街の軸（幹線道路）ができる。東側に面した長さ81mの低層棟。縦ラインが印象的なシャープな顔は、LED照明により表情を変える。桜の咲く中庭は近隣住民にも開かれており、地域を代表するシンボルとなる。（審査委員 渋谷卓司）



審査委員長 久 隆浩

奨励賞 中之島フェスティバルタワー



建築位置：大阪市北区中之島2-3-18
完成年月：2012年10月
主用途：事務所 商業施設 集会場
建築主：㈱朝日新聞社
設計者：㈱日建設計
施工者：㈱竹中工務店
撮影者：古田雅文

〈講評〉
1958年開館以来音楽に催しに花束贈呈役にと通った懐かしいフェスティバルホールが巨しく高く現れた。手の掛けられた壁面や柱、朝日新聞ビルのイメージ、南面のレリーフの継承がレッドカーペットのエントランスと共に風格を持って馴染んでいる。寒い季節は並木とイルミネーションが美しい。（審査委員 夏原見子）

奨励賞 日本圧着端子製造株式会社



建築位置：大阪市中央区道修町3-4-7
完成年月：2013年6月
主用途：事務所
建築主：日本圧着端子製造㈱
設計者：Atelier KISHISHITA + Man'go design
施工者：鹿島建設㈱
撮影者：絹巻 豊

〈講評〉
大阪の商業の中心地・船場にあって、外壁全面に4寸角の国産杉材を格子状に取り付けた大胆なデザインが目を引く。木製格子は、防火地域における外装の木質化への挑戦的な試みであると同時に、外部と内部を緩やかにつなぐ緩衝装置として機能している。（審査委員 中嶋節子）



審査風景

理事会報告

文責 本会事務局

日時 三月十八日(水)十六時～十七時三十分
場所 KKRホテル

出席 理事三三名、監事二名、他一八名

(1) 二六年度決算見込みについて

二月末日の当期経常増減額は、収入一五二、五四八、〇九五円、支出一二五、六七三、七九四円、差引二六、八七四、三〇一円を報告して承認された。

二六年度収支決算の見込みは、約八〇〇万円の黒字収支差引で推移していることを報告して承認された。

(2) 二七年度事業計画について

公益社団法人としての基本目標を掲げて、公益目的事業Ⅱ(地域社会へ貢献を図る事業)、公二(建築文化の発展を図る事業)、公三(建築士の育成を図る事業、収益事業、その他事業の五部門に区分した事業項目と目的を明記したものを平成二七年度事業計画として承認した。

(3) 二七年度予算について

基本的には二六年度決算見込み額を参考にし、二七年度予算を設定した。また来年度の正会員数は二五〇名減と想定、監理技術者講習及びインスぺクション講習事業による活性化等を期待し、本会の財政安定化に向けて二層の努力をお願いする。以上の結果、平成二七年度予算は、収入及び支出を一四、六三三、〇〇〇円、差引額を〇として承認した。(四) 二七年度機構・会務分掌案について
新年度の機構では、社会貢献関連の充実かつ活性化を受けて業務支援系と地域支援系に二分化する。人事では、理事・監事候補者の会務分掌案について承認した。今後これらの役員候補者を定時総会に諮り理事・監事を選任する。

建築相談

建築士の見たトラブル事例(二十七)

建築士が中立であることの重要性

編・構成 橋本頼幸

今月は、相談委員の守屋二之様に原稿を頂きました。現地相談事例からの紹介です。

〈相談事例〉建築後の不信感

電話相談受付から。大手ハウスメーカーではなくアフターフォローに期待して近くの工務店に頼み新築した鉄骨三階建て住宅。工事中に専職人から鉄骨が傾いている事を、たまたま耳にして不信感を持った。住宅瑕疵保険に入っているが、竣工後もサッシからの雨漏りが発生し、室内ドアが傾くなど不具合が生じた。その時々工務店の対応が悪く心配している。専門家に家全体を見てもらい、アドバイスをしたい。との事で現地相談。

①鉄骨柱の傾きがある(工事中職人談による)

：簡易傾斜器にて測定するも正常な数値。

②サッシからの雨漏り

：サッシメーカーで対応済み、現在は無い。

③一階階段下納戸保管写真の水害

：サッシ雨漏り発生当時、現在は無い。

④三階浴室使用時二階リビング外壁面で水滴音

：娘さん使用時のみ音発生する(当日長時間試行するも音は発生しなかった)

⑤三階オーディオ室床に不陸がある。相談者所持3cm丸型気泡管にて

：スピーカーの重量によりピンポイントで不陸が発生している様子。他所測定では標準値。

⑥最上階への階段室屋根面の黒影に対する不安、建築主脚立撮影による)

：同様に撮影して確認したが、防水押えコンクリート面の単なる汚れであった。亀裂等も見られず概ね正常と思われる。

住宅瑕疵保険に対する誤解(何でも直して貰えると誤認)を解きつつ時間はなかったが、相談主が不安に思っている箇所をひとつひとつ確認しながら説明を行い、建物にはメンテナンスが必要なこと、その時期等の説明を行った。

〈相談事例〉メンテナンス後の不信感
ハウスメーカー築十五年目、屋根、壁のメンテナンス修繕を勧められ工事を行った。足場解体後、南側コロリアル屋根に足跡がたくさんついていて、また太陽光線が当たると直線状に白い点々が光る。不必要な釘を打ち付けたのではない。説明が二転三転するし、心配ないと言わない。契約金半額支払わず交渉中、後日足場立てて工事予定、現地を見てもらいたい。

足場設置日程にあわせ現地相談。当日はハウスメーカー施工部門責任者立ち会いののもと、相談者からの聞き取り及び屋根塗装状況の確認を行った。コロリアル屋根は黒色の艶有り塗装を施工しており、塗装面及び塗装垂れによる玉状固形部が太陽光の反射により、地上から見ると光って見える現象が生じている。全面に塗装は行われており、足跡や、平面部の釘打ち等はなく、特に不具合は認められない。相談者は、塗装後に光るとは説明を受けておらず納得出来ない。ハウスメーカーによると、過去に同様の物件が多数あり、後日事例を見て納得いただくという形で、立ち会いを終了した。

建築士の立会と第三者性
第三者の建築士が説明したり、調査に立ち会ったりすることは、こじれてしまった関係をほぐすのに有効です。また、中立を保持することは、依頼者からは当然ながら、相手の業者などにも信頼されることにつながります。せっかくの新築やリフォームが心配や不安ではなく、安心につながるようなアドバイスや提案ができるのも建築士の重要な役割ではないでしょうか。

編集後記

「建築の射程」について

射程・発射起点と着弾点との水平距離
(広辞苑)

二〇一三年四月から始まった「建築の射程」と題する連載は本号まで二五回を数えました。趣旨としては、できるだけ大文字の建築や技術ではなく、小文字の建築や技術を取り上げたい、その過程で新しい建築と文化のありかたについて多角的に考えることができなにか?という思いから始まったものです。関西/全国、新しいもの/古いもの、研究者/実務者、の双方方向にまたがる話題を取りあげたいと考えて進めてきました。

毎号のトピックを分類すると、環境/まちづくり/NPO/都市遺産/再生/情報/他者へのまなざし、というキーワードが見えてくるようです。

このような建築そのものを真正面から取り上げるといふより、やや遠回りしながら見るような感覚は、編集者の個人的性癖によるのかもしれません。

ではいったい「建築」とはなになのか?

「連載全体が包含している行為や事象」という私なりのイメージを「射程」ということばに託しているのですが…。

堅苦しい話はこの程度にして、内情をお話すると当初の予定では、三号連続の企画をする、とか春夏秋冬の季節感にふさわしいテーマにする、とかいろいろと考えたのですが、結局のところ自転車操業、行き当たりばつたりの域を出ていません。この行き当たりばつた感じが「時代の空気」を切り取ってくればありがたいのですが。いかがでしょう。



日本の建築は、日本のCADがつくる。

日本の設計に最適化された秀逸な建築設計システムが業務効率化と受注拡大を支援します。

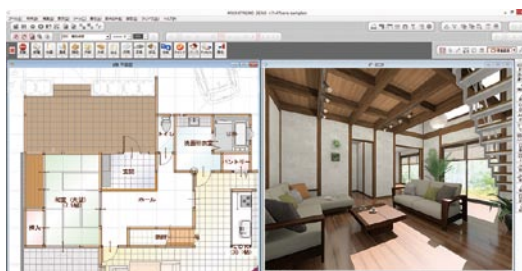
一般建築設計向け



GLOBE
Japanese Building Information Modeling CAD System

BIM建築設計システム グローブ

戸建住宅設計向け



ARCHITREND ZERO
3D 建築 CAD システム アーキトレンド ZERO

抜群の操作性で、流れるような高速オペレーションを実現! 間取りや屋根などの基本データから、瞬時に3Dモデルを作成し、各種図面や書類、CGパースなどを一気通貫で作成。多彩なプレゼン機能も搭載、外皮計算の自動化をはじめ各種申請もスピーディーに! シンプルな画面デザインで操作性、機能性をアップしました。

ARCHITRENDが
新しく
なりました!

BIM設計を始めるなら「GLOBEレンタルパック」で!

これまでBIM設計には初期導入費などの高いコストが必要でしたが、新発売の「GLOBEレンタルパック」では、BIM設計を始めたい方に最適な、初期費用をおさえた低価格での導入が可能です。GLOBEが御社の設計工程を大幅に短縮し、効率化と受注拡大を支援します。

無料
体験版
あります!

福井コンピュータの CAD スクールで納得いくまでスキルアップ! ゼロからの運用支援はもちろん、ユーザー様向けの特別講座も充実しています!

福井コンピュータの CAD スクール サポートサービス「スマートスクール」

- CAD の習得時間を短くしたい!
- 早く業務を効率化させたい!
- 新人の教育を徹底させたい!
- CAD スキルを社内共有したい!
- 明日からすぐ使えるテクニックが欲しい!

ひとつでも当てはまれば
「スマートスクール」が
おすすめです!



①業務に沿った講座内容

初期操作はもちろん、お客様の業務に合わせて様々なカリキュラムをご用意しています。

②期間中何度でも受講可能*

基本モデル作成・プレゼン・各種申請・見積り・特別講座が3か月間何度でも受講いただける「ZERO スクールキット」がおススメです。

③ネットで簡単予約

ユーザー専用サイト「FC コンシェルジュ」から、開講スケジュールの確認や受講予約、予約状況確認などが簡単に行えます。

◎充実した設備環境で受講いただけます

広い教室、最適化された専用 PC を準備、またライブ配信を用いてプロの講師による分かりやすい解説を行います。



*「GLOBE」をご利用の方は、1回・1コマ/1人ずつ受講いただける「スポットスクール」がございます。

福井コンピュータアーキテクト株式会社

□本社/福井県坂井市丸岡町磯部福庄5-6

札幌・盛岡・仙台・新潟・長野・埼玉・高崎・水戸・宇都宮・千葉・東京・横浜・静岡・名古屋・岐阜・福井・京都・神戸・大阪・高松・松山・岡山・広島・山口・福岡・大分・熊本・鹿児島・宮崎・沖縄

●製品に関するお問合せは[カスタムサポートセンター]

0570-550-291

上記ナビダイヤルは福井県坂井市に着信し、着信地までの通話料はお客様のご負担となります。また、通話料金につきましてはマイラインの登録に限りならず、NTTコミュニケーションズからの請求となります。携帯電話からのご利用の場合は20秒ごとに10円の通話料がお客様の負担となります。

●体験版ダウンロード/資料請求は

福井コンピュータ

検索

<http://archi.fukuicompu.co.jp>



三輪そうめん山本本社
設計：竹中工務店／狩野忠正（元社員）

三輪そうめん山本は、300年を迎えようとする歴史（1717年創業）を持つ老舗である。この本社建物は、奈良・三輪山の麓に位置し、今から35年前の1980年に完成した。平面計画は、使用目的によって棟別に分け、道路側から事務棟、工場棟、倉庫棟とし、建物と建物の間に構成された中庭に本社としての個性を持たせている。設計条件は、目立たない建物、人々が寄りつきやすく親しみやすい建物とすることであった。大きな寄棟の瓦屋根は周辺の環境に合うように、深く伸びた軒庇は変化の激しい三輪の気象条件から外壁を護り、長い時間の使用に耐えるように考えられた。

狩野忠正氏は、日本の建築が長きにわたって大切にしてきた屋根というテーマに真正面から取り組み、その結果、大らかで力強い美を備える建築を数多く手がけてきた。自然と溶け合う建築を目ざすばかりでなく、氏の設計する建築の底下の空間は人を温かく迎え入れるとともに、人が自然と向き合うための場を実現してきた。私たちは、このことを建築の本質を突き詰めてきた氏からのメッセージとして胸に刻んで、建築・まちづくりに取り組まなければならない。

1981年第6回吉田五十八賞、2014年第14回日本建築家協会25年賞受賞

撮影：東出清彦 文：荒木公樹

